(121) SP814

位置と検出面　SP814（第259図）はE62区に位置する柱穴である。第Ⅲ面から検出されたもので、径0.25mを測る。

出土遺物　出土遺物（第259図）には、1277の中国景徳鎮窯系青花皿がある。小野分類の皿B１群に相当する。

9　その他の出土遺物

本項では、遺構に伴わない包含層出土の土器、土製品、石製品、玉類、金属製品、銭貨等を紹介する。なお、銭貨については前段で紹介した遺構から出土したものも含め一括して掲載している。

（1）各区の出土遺物

C61区出土遺物（第260図1278、1279）

備前焼擂鉢　1278は焼締陶器備前焼擂鉢である。口縁部は直立し、端部が内傾する。外面には凹線は認められない。乗岡編年の中世６期に相当するもので、16世紀前半代に比定される。

土錘　1279は土錘で、一部が欠損する。

D61区出土遺物（第260図1280）

京都系土師器　1280は京都系土師器である。口径10.3～10.5cmを測るもので、口縁部はほとんど外反しない。京都系土師器２期に比定されるもので、16世紀中葉～後葉に位置づけられよう。

E61区出土遺物（第260図1281～1292、第262図1314～1316）

土師質土器　1314、1315は底部糸切りのものである。1314は口径に比し底径の小さな坏である。体部は内湾しながら口縁にいたる。口径12.7cm、底径6.6～6.8cmで、14世紀初頭に位置づけられる。1315は内面にロクロ痕が残るものである。16世紀前葉に比定される。

京都系土師器　1281、1282、1316は京都系土師器である。1316は薄手のものである。1281は復元口径11.6cmを測るもので、口縁部は短く外反する。口縁部にはスス状の付着物がみられ、灯火器として使用されたことが分かる。1282は1281に比べると薄手で、器高も深い。口縁部は短く外反する。1316が京都系土師器１期に、1281が京都系土師器２期～３期に、1282が２期に比定されよう。

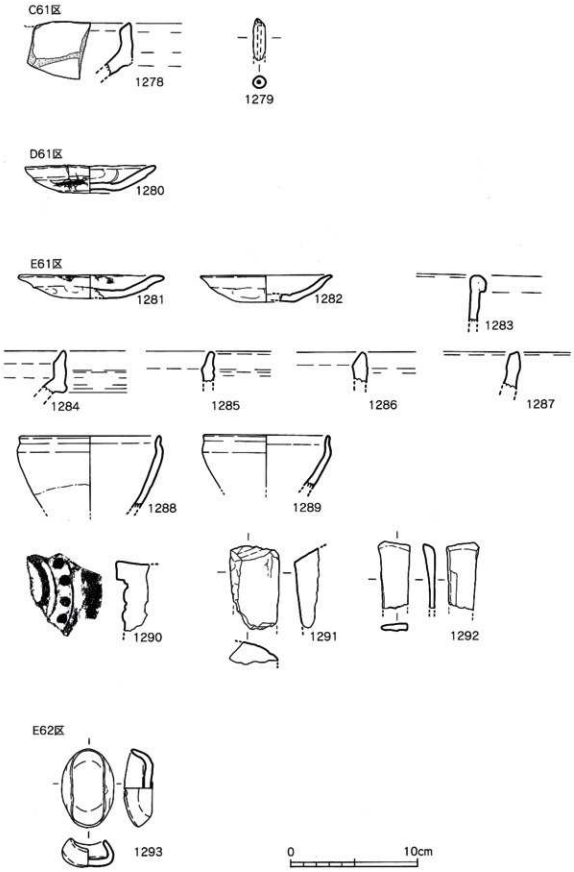
瓦質土器　1283は瓦質土器火鉢である。口縁部外面が肥厚する。16世紀後葉以降のものである。

備前焼擂鉢　1284～1287は焼締陶器備前焼擂鉢である。口縁部資料であるが、小破片が多く、全容は不明である。1284は口縁端部の内傾が著しいもので、強いナデにより尖り気味に仕上げられている。外面には軽い凹線が認められる。1285も1284と同様な形態を呈するが、外面の凹線はより明瞭である。1286も口縁端部が内傾する。しかし、1284などに比べると、それほど強いナデが施されておらず、鋭角的な尖り方はしない。1287は口縁端部がわずかに内傾する。以上のうち、1286と1287は乗岡編年中世６a期に、1284と1285は中世６b期に位置づけられよう。

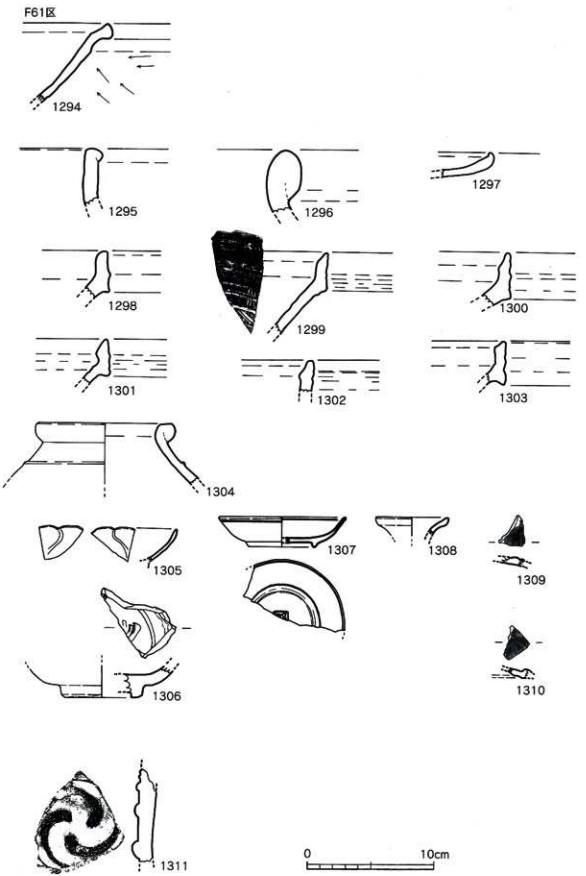
瀬戸美濃系　1288、1289は瀬戸美濃系の天目茶碗である。口径10～11cmを測る。

軒丸瓦　1290は軒丸瓦である。中心に巴文が配置され、周囲には２条の圏線と珠文がみられる。

砥石　1291、1292は砥石である。1291は磨面が板状に剥がれた欠損品である。幅は４cmを測る。1292も欠損品であるが、幅2.5cmの小型品であると思われる。両面を使用しており、厚さは最も薄い部分で0.5cmである。

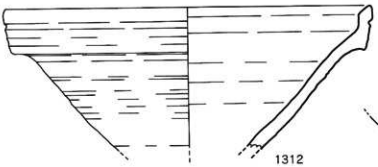


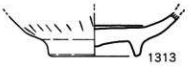
第260図　大友75次C61,D61,E61,E62出土遺物



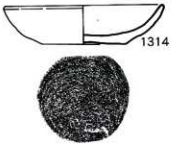
第261図　大友75次F61出土遺物

D62区

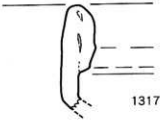




E61区



F61区



第262図　大友75次D62,E61,F61出土遺物

E62区出土（第260図1293）

耳皿　1293は京都系土師器の耳皿である。

F61区出土遺物（第261図1294～1311、第262図1317、1318）

瓦質土器鍋　1294は瓦質土器鍋である。器高が口径に比し低いもので、丸底を呈する。口縁部は内外面を強く摘みナデを施す。体部外面にはヘラケズリがみられる。16世紀代のものである。

備前焼　壺　甕　1295～1303、1317は焼締陶器備前焼である。1295は壺である。口縁部の玉縁は発達しておらず、端部はわずかに丸められ肥厚する。14世紀代のものか。1296、1317は甕である。口縁部の玉縁は垂下せず丸みをもつ、14世紀後半～15世紀のものか。1317は口縁の玉縁が長く垂下する。外面には軽い凹線状のものがみられる。乗岡編年の中世６期に比定される。1297は鉢である。浅い器形で、口

擂鉢　縁部は端部を上方に摘み上げる。1298～1303は擂鉢である。1298は口縁端部が丸く仕上げられるもので、外面には軽い稜がつく。1303は口縁端部が内傾するもので、外面には軽い凹線がみられる。1301は口縁端部が著しく内傾する。外面には軽い凹線が施される。1299、1300、1302は口縁端部が著しく内傾するもので、端部に強いナデが認められ上方に引き上げられる。1299には斜交摺目が残る。以上のうち、1298は乗岡編年の中世５b～６a期に比定される。1303は中世６a期、1301は中世６b期、1299、1300、1302は中世６b～近世１期に各々比定される。

焼締陶器　1304は中国産の焼締陶器壺であると思われる。頸部が内傾し、口縁部が玉縁状を呈するものである。頸部には低い突帯が付される。

青磁　青花　1305～1310、1318は中国産磁器である。1305は型押しによる青磁の菊花皿である。1306は青磁碗底部である。見込み部に文様がみられる。15世紀代のものか。1307は景徳鎮窯系青花皿である。口縁部内外面に界線が施されるのみで、文様は描かれない。小野分類による皿E群に相当する。1308

白磁　は白磁である。瓶の口縁部と思われる。1318は白磁碗の底部である。1309、1310華南三彩である。

華南三彩　小破片のため、器種や部位は不明である。

軒丸瓦　1311は軒丸瓦である。中心に左回りの細い巴文がみられる。

D62区出土遺物（第262図1312、1313）

備前焼擂鉢　1312は焼締陶器備前焼擂鉢である。口縁端部は内傾し、外面には凹線が施される。摺り目は11本単位である。乗岡編年の中世６期に比定されるものである。

青磁碗　1313は中国産青磁碗底部である。外面には剣先蓮弁文が施される。15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる。

１区第Ⅰ面出土遺物（第264、265図）

土師質土器　小皿　1319～1325は底部糸切りの土師質土器である。1319～1322は小皿である。1319は復元口径7.4cmを測るものである。底部と同じ厚みをもつ体部が開き気味に立ち上がる。口径と底径の差が著しい。1320も底部と同じ厚みの体部が開き気味に引き上げられる。器高は低く、口縁部尖り気味である。1321も体部と底部が同じ厚みをもつが、1320に比べ体部は直立気味になる。1322は体部が外反気味に口縁にいたる。1319、1320は14世紀前半代に、また1321、1322は14世紀中葉前後に比定されよう。

坏　1323は坏である。復元口径10.3cm、復元底径4.8cmで、口径に比し底径が著しく小さいものである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反気味になる。14世紀代のものか。

ロクロ痕　1324、1325は体部内面にロクロ痕がみられるものである。1324は内面下半に、1325は内面全体に施される。1325の口縁部にはスス状付着物がみられ、灯火器として使用されたことが分かる。16世紀前葉に比定される。

京都系土師器　1326～1336は京都系土師器である。このうち、1326～1328は口径９cm以下の小型品である。1326はわずかに上げ底状を呈するもので、口縁部は尖り気味である。1327と1328はやや厚みをもつもので、1328は口縁下に軽い段がつく。1327は口縁部にスス状付着物がみられ、灯火器として使用されたことが分かる。1329は復元口径10cmを測るもので、厚手である。1331～1336は口径11～16cmのものである。1326～1329が、口径に比し器高が高いため、やや深い印象の器形であるのに対し、1331～1336は扁平な印象の器形である。1336は口縁部が外反するが、他はほとんど外反しない。1330は器高が高いものである。口縁部周辺に強いナデが施され、内外面に段がつくとともに、端部が尖り気味になる。遺構のうち。1335はやや薄手で京都系土師器１期の可能性をもつが、他は京都系土師器２、３期に位置づけられる。

耳皿　1337は京都系土師器の耳皿である。

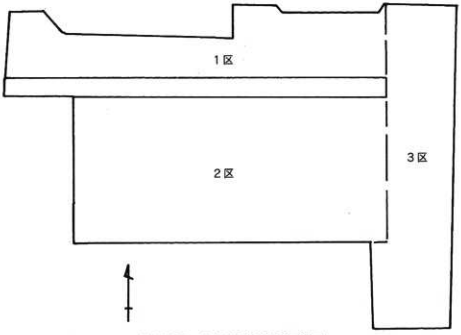
瓦質土器　1338～1340は瓦質土器である。1338は鍋である。外面に鍔状の突帯が付されるタイプである。突帯はほぼ口縁近くまで上がっており、このタイプでも新相に位置づけられる。13世紀末～14世紀初めのものか。1339は茶釜の肩部と思われる。16世紀代のものか。1340は火鉢である。円筒状の器形を呈し、後部外面が補講するものである。16世紀後半代のもの。

備前焼　1341～1351は焼締陶器備前焼である。1341、1342は壺である。1341は短頸壺である。口縁部が短く外反する。16世紀に比定される。1342は壺の肩部である。耳が欠損するが、貼り付け痕が残る。

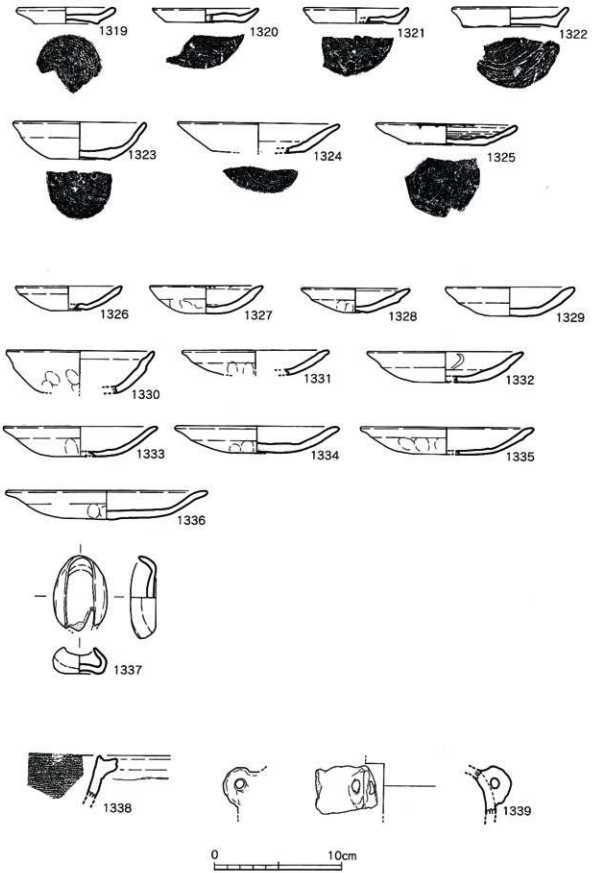
壺

甕　1343は甕である。口縁部の玉縁が垂下し、下部が角張る。外面には凹線が施される。本品は乗岡編年の中世６期にあたる。1344～1351は擂鉢である。1344は口縁部が直立し、端部が丸くおさめられる。口縁帯の下部は外方に引き出される。1345～1347は、若干の差はあるが、口縁端部がわずかに内傾するものである。口縁部外面には凹線などはみられない。1347については摺り目がわずかに観察できる。1348～1350は口縁端部が顕著に内傾する。口縁外面には凹線状のものがみられるものもある。このうち、1348は摺り目の単位が９本以上であることが分かる。1349の摺り目は斜行している。破片資料のため、これが所謂斜交摺り目になるかは不明である。1351は口縁端部に津用ナデを施し、上方に摘み上げる。そのため、端部は著しく尖り気味になる。以上は、乗岡編年で言えば、1344が中世５期、1345～1347が中世６a期、1348～1350が中世６b期（1349の摺り目が斜交摺り目の場合は近世１期）、1351が近世１期に各々位置づけられる。

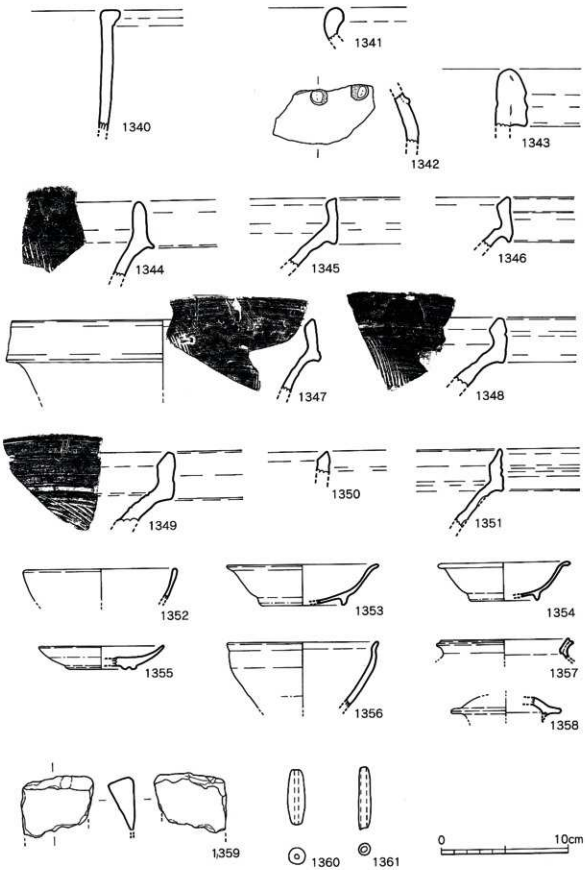
擂鉢



第263図　大友75次調査区区割図



第264図　大友75次１区第Ⅰ面出土遺物(1)



第265図　大友75次１区第Ⅰ面出土遺物(2)

中国産磁器　1352～1355は中国産磁器である。1352は青磁碗で、15、16世紀に比定される。1353、1354は口縁端反の白磁皿である。15世紀後半～16世紀前半のものである。1355も白磁皿で、外面下半が露胎である。15世紀代のものか。

瀬戸美濃系　1356は瀬戸美濃系の天目茶碗である。1357は小型の焼締陶器壺である。口縁部は頸部から短く外方に折れ、頸部より上は粘土を貼り付け厚みを益す。端部は面をなし、凹線状のものが施される。産地は不明であるが中国産か。1358は青磁の蓋である。小型品で、天井部は丸みをもつ。頂部に摘みが付くものと思われる。産地は不明である。

砥石　1359は砥石である。

土錘　1360、1361は土錘である。

1区第Ⅱ面出土遺物（第266図1362～1364）

土師質土器小皿　1362は、底部が糸切りの土師質土器小皿である。体部は底部と同じ厚みをもち、ほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめられる。14世紀代後半に位置づけられよう。

1363は、底部糸切りの土師質土器である。口径9.4～9.6cm、底径4.5～4.9cmを測るもので、口径に比し底径が小さい。そのため、体部は開き気味に立ち上がる。時期的には15、16世紀代に比定されるものと思われる。

土錘　1364は棒状土錘である。

1区出土遺物（第266図1365～1371）

京都系土師器　1365、1366は京都系土師器である。両者とも小型品で、口径8.6cmを測る。1365は厚みを有するもので、端部周辺には強いナデが施され尖り気味になる。1366は比較的薄手である。口縁部にはスス状付着物がみられ、灯火器として利用されたことが分かる。以上は、1366が京都系土師器1期の可能性をもつ。1365は2期以降である。

耳皿　1367は京都系土師器耳皿である。

備前焼甕　1368は焼締陶器備前焼甕である。口縁部はやや垂下した玉縁を呈する。15世紀代に比定されるものか。

中国産白磁　1369は中国産白磁皿である。口縁部端反のもので、15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる。

瀬戸美濃系　1370は瀬戸美濃系天目茶碗である。

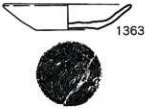
石臼　1371は挽臼の上臼である。天場は中央に向かい傾斜している。側面には角穴の挽手穴がみられる。このほかにも、挽手穴の脇に下面にたっするかたちで穴がみられる。下面はふくみをほとんどもたず、中央に芯棒受がみられる。溝は8区画に復元されるものと思われる。溝は、副溝の配置がやや雑なように感じる。

2区第Ⅰ面出土遺物（第267、268図）

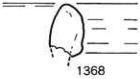
1372～1378は底部糸切りの土師質土器である。1372は小皿である。復元口径8.2cmを測るもので、底部と同じ厚みの体部が直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。14世紀中葉～後葉に比定されよう。1373は坏である。口縁部を欠く、底部の資料で、復元底径10.6cmを測る。体部は底部と同じ厚みをもち、直立気味に立ち上がる。口縁部の形状や口径は不明なので定かではないが、14世紀前半代に位置づけられよう。

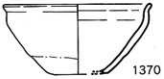
1374～1377は16世紀前半代に比定されるものである。1374は体部が斜方向に直線的にのびる。1375は復元口径8.0cmを測るもので、体部が内湾気味に口縁にいたる。内面下半にはロクロ痕がみられる。1376は復元口径11.6cmを測るもので、体部は斜方向に直線的にのびる。内面体部下半にはロ

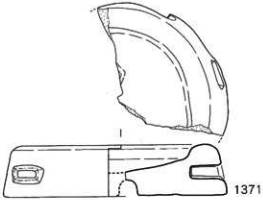
1区第II面

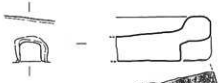


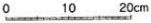
1区出土











第266図　大友75次1区第II面、1区出土遺物

クロ痕が残る。1377は復元口径12.0cmで、1376とほぼ同じである。しかし、器高は1377の法が低く、その分体部が開き気味に立ち上がる。口縁内面にはロクロ痕がみられる。1375と1377には、灯火器として利用された痕跡のスス状付着物が残る。

京都系土師器　1378、1379は京都系土師器である。1378は復元口径9.2cmを測るもので、口縁部が短く外反する。器壁は厚めである。口縁部にはスス付着物がみられ、灯火器としての使用がうかがえる。京都系土師器2期に相当するものか。1379は器壁が薄いものである。口縁部はほとんど外反せず、内面口縁部付近がナデによりわずかに折れる。また、端部は上方に非常にわずかな摘み上げが認められる。京都系土師器1期に比定される。

瓦質土器　1380～1382は瓦質土器である。1382は鍋である。やや深い丸底状を呈するものと思われる。体部は直線的にのび、わずかに口縁部が反り気味である。14世紀代に位置づけられる。鍋は古代以来続いた口縁部がくに字状におれるものと、外面口縁下に鐔状の突帯を付すものが14世紀に入ってもみられるが、それらは15世紀に続くことなく姿を消すものと思われる。16世紀には体部外面にヘラケズりが施されるものがみられる。16世紀代に盛行する鍋の系譜は明らかになっておらず、14、15世紀代の鍋の動向が注目されるところである。1382は、14世紀に出現する口縁部が緩やかに外反する一群と思われる。これらにはタタキを施すものなど、調整や器形にバリエーションがみられる。これらの動向についても不明な部分が多く、今後の課題となろう。1381は火鉢である。口縁が内湾するもので、外面口縁下に2条の突帯を貼り付け、その間に円形の浮文を連続的に付している。15世紀代のものであろう。1382は鉢である。器高4.3cmと比較的浅いものである。口縁部下に強いナデが施され、わずかに外反する。16世紀代のものか。

鍋

火鉢

鉢

備前焼　1383は焼締陶器備前焼擂鉢である。口縁部はやや内傾気味で、口縁外面はナデにより稜が形成される。口縁端部は内傾する。乗岡編年の中世6a期に相当するものである。

中国産磁器　1384～1387は中国産磁器である。1384は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎬蓮弁文がみられる。13世紀代のものである。1386は青磁稜花皿である。腰折れの皿で、口縁部は稜花を呈し内面に文様を配する。15世紀代に比定される。1385は青磁碗で、口縁部外面に雷文が施される。雷文はかなり退化したものである。文様の退化状況から、15世紀代の所産と考えられる。1387は漳州窯系青花碗である。復元口径18.2cmの大型品である。口縁端反で、外面口縁下に界線が1条みられるのみである。16世紀後葉以降のものである。

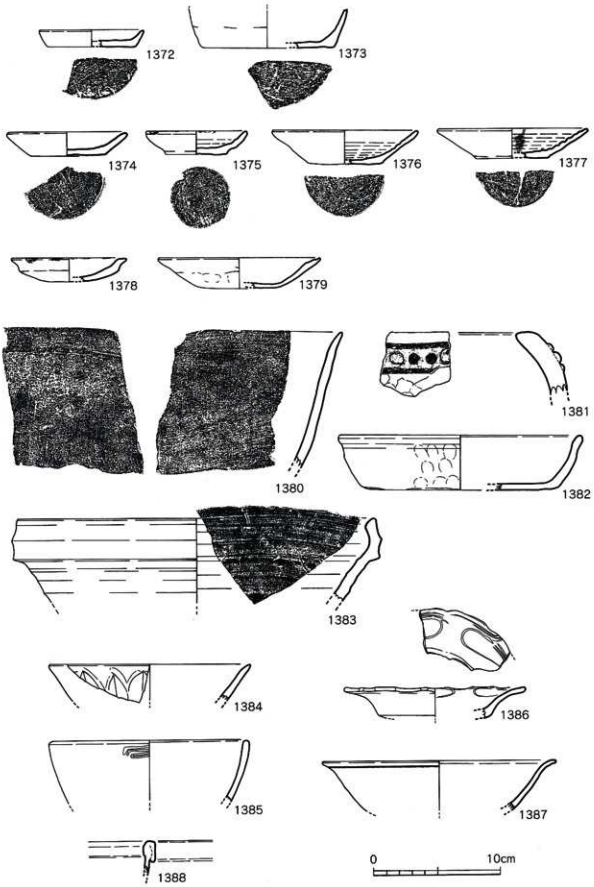
焼締陶器　1388は焼締陶器鉢である。口縁部は粘土を貼り付け帯状に肥厚させ、口縁帯を形成する。中国産の可能性をもつ。

坩堝　1389は土師質の坩堝である。復元口径8.3cmを測るもので、器壁は非常に厚い。内外面には鋼滓と思われるものが付着している。

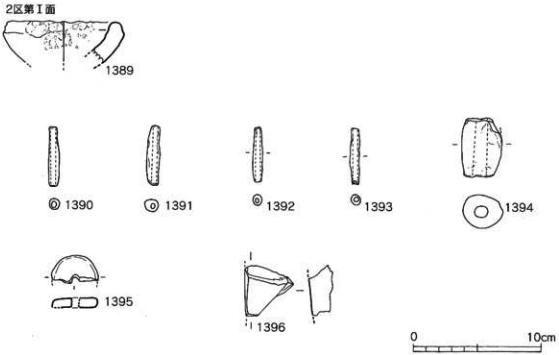
土錘　1390～1394は土錘である。このうち1390～1393は幅0.7～1.1cmと細いもので、いずれも完形品である。長さは4.3～4.7cm、重さ2.2～5.0gである。1314は前者の一群よりも太いものである。幅は前者の3～4倍である。孔もそれに比例し、径が2～3倍になっている。土錘の形態は、孔にとおす紐の太さにより異なっていることが分かる。

円盤状土製品　1395は有孔円盤状土製品である。欠損品であるが、口径3.65cmを測るものである。中央部に孔を有する。

砥石　1396は砥石である。



第267図　大友75次2区第Ⅰ面出土遺物(1)



第268図　大友75次2区第Ⅰ面出土遺物(2)

2区第Ⅱ面出土遺物（第269図）

土師質土器　1397～1401は底部糸切りの土師質土器である。1397は復元口径11.2cm、復元底径5.0cmで、口径に比し底径が小さいものである。底部は厚く、体部が内湾気味に口縁部にいたる。1398は復元口径13.0cm、復元底径6.0cmで、1397と同様に口径に比し底径が小さい。やはり体部に比べて底部が厚く、内碗気味に口縁にいたる。両者は14世紀前半代に位置づけられよう。1399は体部が斜方向に立ち上がるもので、端部が尖り気味になり、わずかに外反する。体部内面下部にロクロ痕が残る。1400も体部が斜方向に立ち上がる。体部内面下半にはロクロ痕がみられる。1401は口径9.7cmで、底部から内湾気味に口縁部にいたる。器高は1.85cmと低い。1399～1401は16世紀前半代に位置づけられる。

京都系土師器　1402は京都系土師器である。復元口径10.2cmを測るもので、口径に比し器高が高く、やや深めの印象を受ける。京都系土師器２期のものか。

焼塩壷の蓋　1403は焼塩壷の蓋である。

瓦質土器　1404、1407は瓦質土器である。1404は火鉢底部で、板状の脚が付される。体部下部に２条の低い突帯が近接して付されている。1407は擂鉢である。摺り目は10数条単位である。両者とも16世紀代のものであろう。

1405は東播系須恵器こね鉢である。

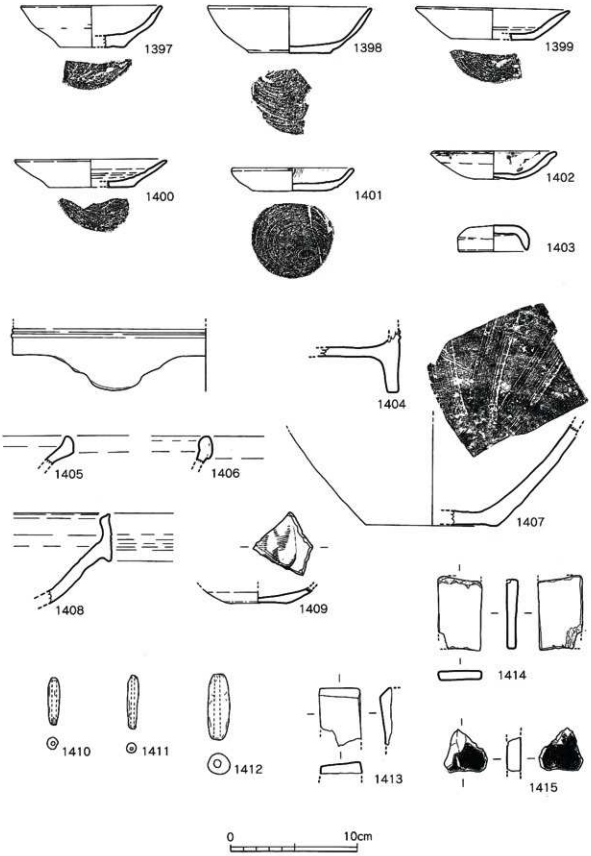
焼締陶器　1406、1408は焼締陶器である。1406は口縁部玉縁状を呈する鉢である。中国産か。1408は備前焼である。口縁端部がわずかに内傾するもので、乗岡編年の６a期に相当する。

1409は中国同安窯系青磁皿．である。12世紀代のもの。

1410～1412は土錘である。

1413、1414は砥石である。

1415は滑石製の石鍋片である。



第269図　大友75次2区第Ⅱ面出土遺物

２区出土遺物（第270、271図）

土師質土器
坏

1416～1421は底部糸切りの土師質土器である。このうち1416、1421は坏である。1416は復元口径12.8cm、器高2.75cmを測るもので、低平な印象を受けるものである。体部は底部と同じ厚みで立ち上がる。体部は中程がやや膨らみ、先端部が細くなる。14世紀後半代に比定されよう。1421は復元口径12.4cm、復元底径7.6cm、器高3.7cmで、口径に比べ底径が小さい。また1416に比べ器高も高く、全体に深い印象を受けるものである。底部は厚く、体部はやや内湾気味に口縁部にいたる。

小皿

14世紀前半代に中心を置くものであろう。1417～1420は小皿である。1417は復元口径7.6cmを測るものである。体部は底部と同じ厚みで引き上げられるが、口縁部に向かい尖り気味になる。体部の立ち上がり部はシャープであるが、斜方向に立ち上がる。14世紀中葉前後のものか。1418は他の小皿に比べて器高が高いものである。体部は底部と同じ厚さで斜方向に口縁部に向かう。口縁端部は丸くおさめられる。14世紀前半代に位置づけられよう。1419は口径7.7～7.8cmを測るもので、底部と同じ厚みの体部が立ち上がる。体部は一旦斜方向に立ち上げたのち、上方に摘み上げ、先端部は尖り気味になる。14世紀中葉前後に比定されよう。1420は厚い底部から、薄い体部が短く立ち上がるものである。器高に比し底部が厚いため、全体として低平で浅い印象を受ける。14世紀後半代のものか。

土師質土器
ロクロ痕

1422、1423は16世紀前半代に位置づけられるもので、底部糸切りである。1422は口径4.4～4.5cmの小型品である。体部は斜方向に立ち上げられ、端部は丸くおさめられる。1423は口径12.9cm、器高2.5cmを測るものである。体部はわずかに外反気味に斜方向にのび、口縁部にいたる。体部内面にはロクロ痕が残る。

京都系土師器

1424～1433は京都系土師器である。1424～1427は口径約８cmのものである。いずれも口縁部は外反しない。1426は上げ底状を呈する。また、1424、1425は口縁部にスス状付着物がみられ、灯火器として使用されたことが分かる。以上は、京都系土師器２期に位置づけられよう。1428～1430は口径11～12cmのものである。1428と1429がやや深く、1430は扁平な印象を受けるものである。口縁部の形態も若干異なり、1427は内側が外方に折れ、1430は外面にわずかに段がつく。以上は、京都系土師器２期に比定される。1431～1433は口径14cm以上のものである。1431は復元口径14.6cm、1432は復元口径17.6cm、1433は復元口径19.4cmを測る。これらは、1431と1432が京都系土師器１期の可能瀬をもつもの２期に比定されよう。

備前焼
壺

1434～1444は焼締陶器備前焼である。このうち1434は壺である。1434は短頸壺で、口縁部は頸部で短く折れ、直立する。16世紀代のものであろう。1436は肩部に環状も貼り付けがみられる。

甕

1435、1437、1438は玉縁の口縁を呈する甕である。1435は口縁短部付近で外反し、外面に玉縁を形成する。玉縁は球状を呈する。14世紀代のものである。1438は玉縁下方に長く垂下するが、玉縁下部は角張らない。15世紀代に比定される。1437は玉縁の下部が角張り、外面に凹線が施されるものである。

擂鉢

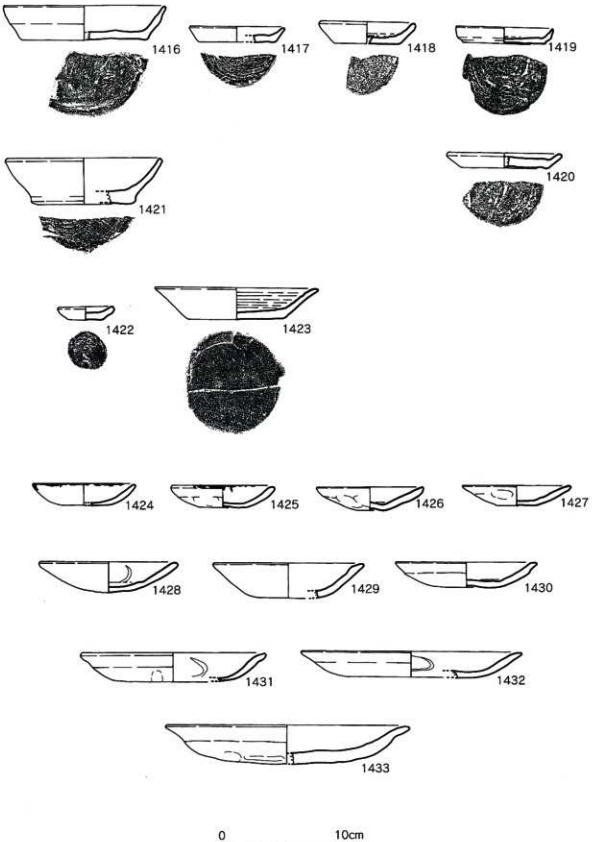
乗岡編年の中世６期に位置づけられる。1439～1444は擂鉢である。1439は口縁帯がわずかに内湾し、短部は丸くおさめる。口縁帯外面には凹線などはみられない。乗岡編年の中世６a期の所産である。1440～1443は口縁端部が内傾するものである。口縁帯外面に凹線が施されるもの（1440、1441、1443）とそうでないもの（1442）がある。中世６b期に比定される。1444は口縁端部の内傾がさらに顕著になったものである。しかし、強いナデに伴い生じる端面の凹みはみられない。中世６b期段階のものであろう。

焼締陶器

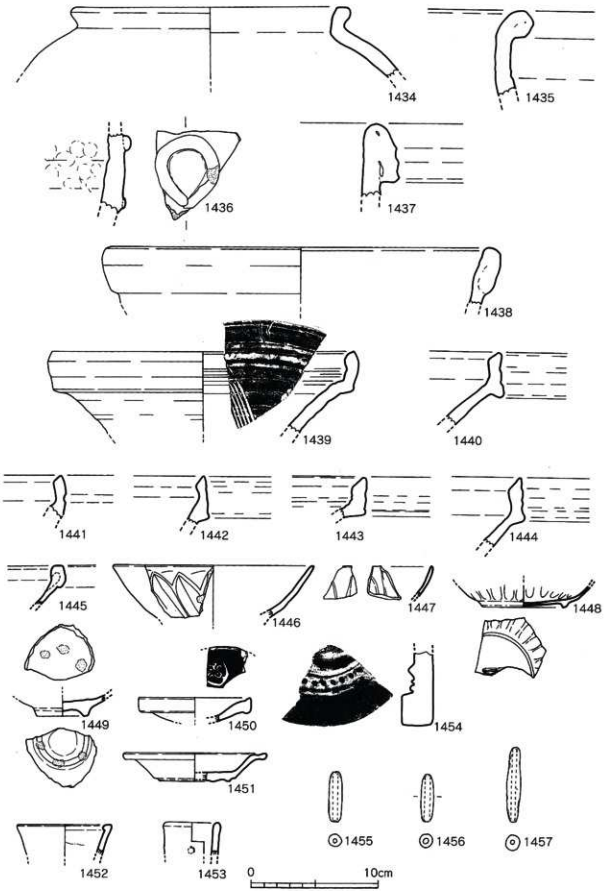
1445は焼締陶器鉢である。体部は斜方向に開き口縁部にいたる。口縁部は肥厚し直立気味になり、口縁帯を形成する。中国産か。

中国産磁器

1446～1448は中国産磁器である。1446は龍泉窯系青磁碗である。外面に鎬蓮弁文がみられるもので、13世紀代に比定される。1447は青磁菊花皿で、16世紀代のものである。1448は白磁皿で、型押



第270図　大友75次２区出土遺物(1)



第271図　大友75次2区出土遺物(2)

しによる成形が行なわれている。また、外底面には字款が描かれたものと思われ、一部が残存する。16世紀代中葉以降の所産である。

朝鮮王朝産　1449は白磁碗底部である。高台は幅広く、低いものである。見込み部と畳付に目積み痕が残る。朝鮮王朝産と思われる。

褐釉陶器　1450は褐釉陶器の蓋である。上面にスタンプ文がみられる。中国産であろう。

折縁皿　1451は折縁皿である。

1452は焼締陶器鉢である。復元口径8.0cmの小型品である。

青磁掛花入　1453は青磁である。復元口径は4.6cmと小型品であるが、口縁部から2cm下がった部分に孔がある。掛花入の可能性をもつ。中国産か。

軒丸瓦　1454は軒丸瓦である。中央には巴文が配され、その周囲に圏線と珠文がみられる。

土錘　1455～1457は土錘である。いずれも幅1.0～1.2cmであるが、1455と1456が長さ4cm弱であるのに対し、1457は1.5倍の長さをもつ。

3区出土遺物（第272～276図）

土師質土器坏　1458～1465は土師質土器坏で、いずれも底部糸切りである。1458は全体に薄手である。体部は底部と同じ厚さで、斜方向に立ち上がる。体部は直線的にのび、端部は尖り気味である。14世紀初頭まで遡る可能性をもつ。1459は底部よりやや薄い体部がシャープに立ち上がる。体部はわずかに内湾気味で口縁にいたる。先端部は尖り気味である。1460も1459と同様な形態を呈するものである。両者は14世紀前半代に位置づけられよう。1461は底部と同じ厚みの体部がシャープに立ち上がる。体部は斜方向に直線的に口縁にいたるが、先端部が急激に細くなる。14世紀前半代のものであろう。1462は底部から体部下半にかけては同様な厚みで、体部上半は先端部に向け細くなる。体部の立ち上がり部は丸みを有する。1463も基本的には1462と同様な形態を呈するが、1462に比べ体部立ち上がりの部分がより厚い。また、先端部もより尖り気味である。両者は14世紀後半代に位置づけられる。1464は基本的に1459や1460と同形態である。時期的にも14世紀前半代に位置づけられよう。1465は器高3.7cmでやや深い印象を持つものである。体部の立ち上がり部はやや丸みをもち、体部は口縁部に向かい細くなる。15世紀代に降る可能性をもつ。

小皿　1466～1473は底部糸切りの土師質土器小皿である。1466は復元口径8.0cm、器高0.9cmである。体部は底部から断面三角形に引き出される。浅く扁平な印象を強くもつものである。14世紀末以降に比定されよう。1467も底部から断面三角形の体部が引き出される。やはり、扁平な感じを強く受けるもので、14世紀末以降のものであろう。1468は底部と同じ厚みの体部が立ち上がる。立ち上がり部はシャープで、直線的に口縁にいたる。口縁部は尖り気味である。14世紀後半代であろう。1469は底部とほぼ同じ厚みの体部が斜方向に立ち上がる。体部は直線的に口縁にいたり、端部は丸くおさめる。14世紀前半代に比定されよう。1470は底部に比べやや薄い体部が斜方向に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。14世紀前半代のものか。1471も基本的には、底部と同じ厚みの体部を斜方向に立ち上げるものである。14世紀前半代に位置づけられよう。1472、1473は器高2.0cmを測る器高の高いタイプである。1472は底部と同じ厚みの体部が直立気味に立ち上がる。立ち上がり部は丸みをもつ。1473は厚い底部から体部が斜方向に立ち上がる。両者とも14世紀代のものであろう。

ロクロ痕　1474は底部糸切りで、ロクロ痕が残るものである。体部は斜方向にのび、端部は丸くおさめる。16世紀前葉のものである。

京都系土師器　1475～1479は京都系土師器である。1475は復元口径8.6cmである。口縁部外反せず、外面口縁したに軽い段がつく。京都系土師器2期のもの。1476は厚手のものである。口縁部は外反しない。口縁部や体部内面にスス状付着物がみられることから、灯火器として使用されたことが分かる。京都

系土師器３期か。1477は比較的薄手のものである。口縁部はわずかに外反する。京都系土師器２期である。1478と1479は器高が高いタイプである。1478は体部が内湾気味に口縁部にいたるもので、端部は尖り気味である。1479は外面口縁下に段が付される。両者は京都系土師器３期に比定される。

焼塩壷の壷　1480、1481は焼塩壷の壷である。

瓦質土器　1482～1484は瓦質土器である。1482は鉢である。口縁端部は外側に肥厚する。外面口縁直下には連続したスタンプ文が付される。また、内面には横方向のハケメが施される。16世紀代のものであろう。1483は体部最大径部分に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の上下に異なるスタンプ文を連続的に配する。16世紀代に比定されよう。1484は火鉢である。円筒状を呈するもので、体部下部には低い突帯がみられる。また、板状の脚部が付される。16世紀代のもの。

焼締陶器　1485、1486は焼締陶器である。1485は甕であろう。口縁部は頸部から外に折れ、端部を上方に引き上げる。1486は鉢である。丸い体部から一旦外方に折れ、口縁部はわずかに上方に向く。両者とも時期や産地は不明である。

備前焼　1487～1498は焼締陶器備前焼である。このうち1487.1485は壷である。1487は肩の張る体部をもち、頸部から短く口縁部が立ち上がる。口縁部は外側が丸く肥厚する。また、体部中程には凹線が１条配される。16世紀に比定される。1488も1477と同様な器形を呈するが、1477と異なり口縁部は肥厚しない。1489～1492は甕である。1489は口縁部の玉縁がわずかに長くなったものである。1490は下部への垂下が目立ち始めたものである。1491は垂下した下部が角張るもので、外面に凹線が施される。1492は頸部から口縁にかけて内湾する。時期は乗岡編年によれば、1489が中世３期、1490が中世４期、1491が中世５期、1492が中世６期に各々相当する。1493～1496は擂鉢である。このうち、1493と1494は乗岡編年の近世１期にあたる。1494にみられるような斜交摺目が出現する時期である。口縁部は端部が内傾するもので、端面には端部を引き上げる際の強いナデに伴う凹みがみられる。1495、1496は口縁端部が内傾するが、端面の凹みはみられない。中世６期に相当する。1497、1498は瓶の口縁部である。このうち1497は復元口径が3.0cmであることから、小型品であろう。

壷

甕

擂鉢

中国産磁器　1499～1501、1503は中国産磁器である。1499は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文がみられる。13世紀代のもの。1500は白磁碗の底部。1501は白磁口禿皿の底部。1503は漳州窯系青花碗である。

折縁皿　1502は折縁皿である。

坩堝　1504は土師器坩堝である。復元口径14.0cmを測るやや大型品である。器壁は1.5cm以上あり極めて厚い。また、内外面には滓の付着が顕著にみられる。

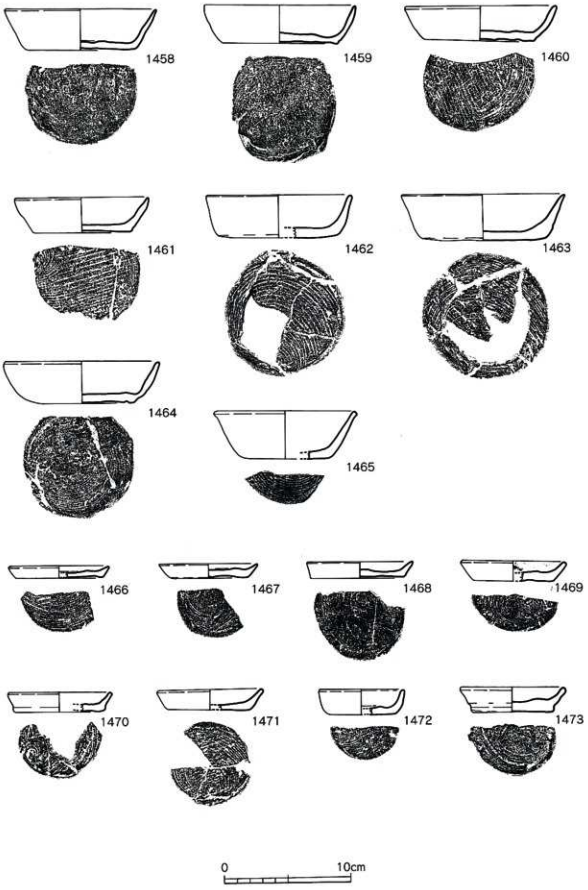
土錘　1505から512は土錘である。1505～1509は長さ3.8～4.05cmのものである。1510はこれらよりも長い5.3cmを測る。1511は欠損品であるが、1510と同規模のものであろう。

砥石　1513は砥石である。1513は欠損品であるが、幅4.5cm、厚さ1.1cmであることから小型品であると思われる。表裏面とも磨り面として使用している。

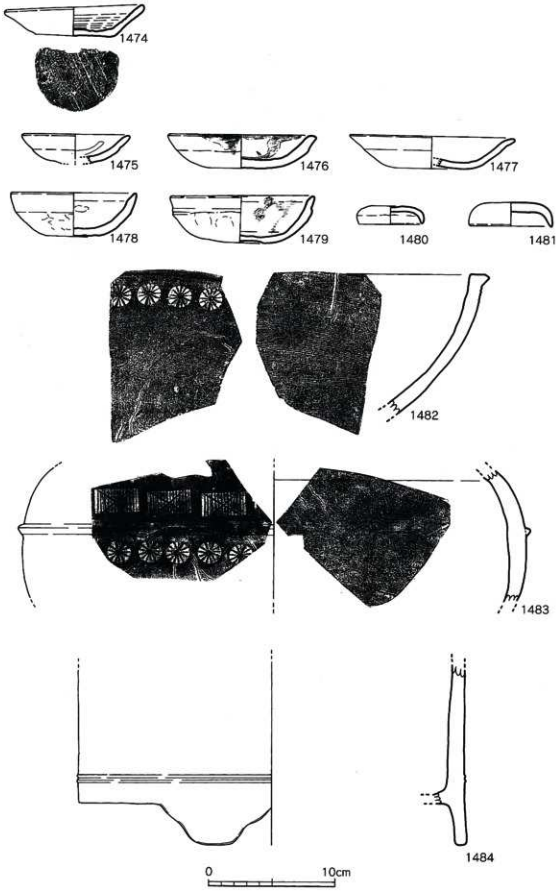
硯未製品　1514、1515は硯の未製品と思われる。いずれも所謂赤間石である輝緑凝灰岩である。1514は縦方向に、鑿状工具による切断面が残る。1515は三角形を呈するが、うち２変に鑿状工具による切断面が残る。

石造品　1516は凝灰岩製五輪塔水輪部である。上面と下面に、火輪及び地輪と各々接合するための凹部と凸部がみられる。

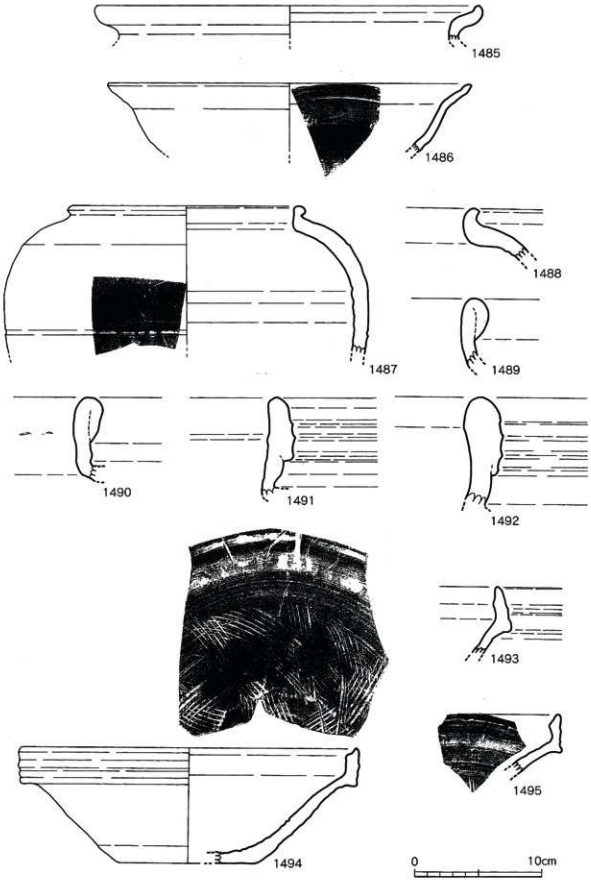
1517は石幢の基部の可能性をもつ。凝灰岩製で八角形を呈し、中央に接合のための円孔がある。



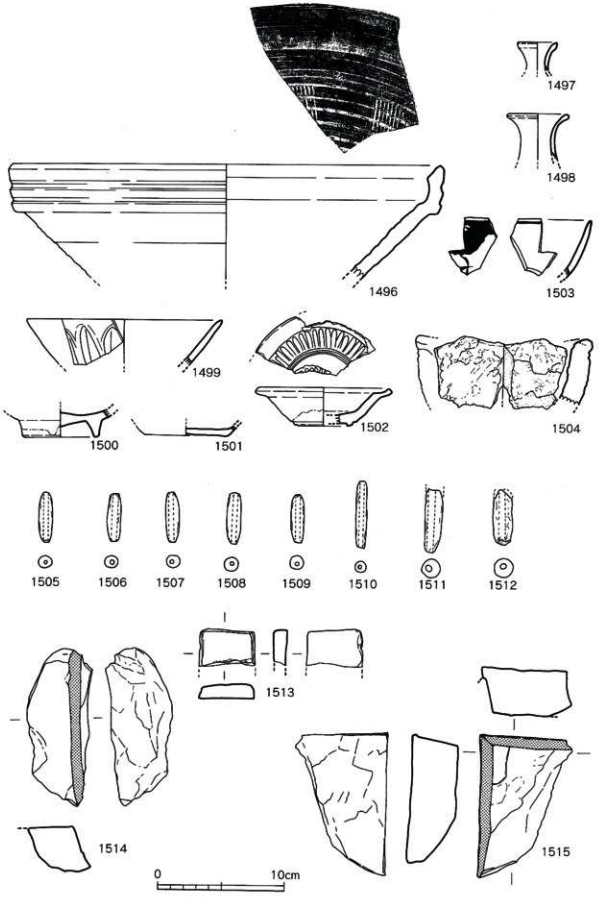
第272図　大友75次３区出土遺物(1)



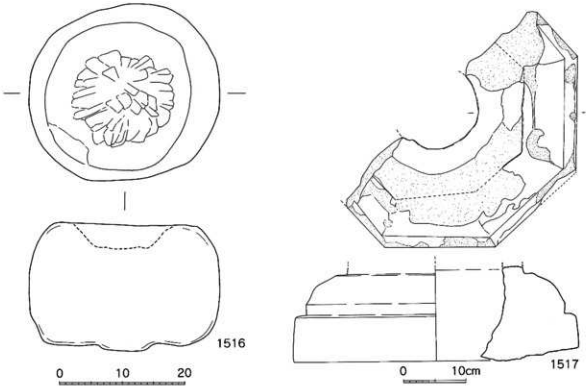
第273図　大友75次３区出土遺物(2)



第274図　大友75次３区出土遺物(3)



第275図　大友75次3区出土遺物(4)



第276図　大友75次３区出土遺物(5)

３区道路面出土遺物（第277図）

３区では第２南北街路の西側側溝と考えられるSD212が確認されている。しかし、道路面自体は工業用水路設置に伴う攪乱などで、残存状況が悪く面的な確認はできなかった。ここでは、部分的に道路面を確認した際に出土した遺物を紹介する。

1518、1519は京都系土師器である。両者の口径は約11.5cmで、口縁部はあまり外反せず、ヨコナデに伴う軽い段が外面口縁下にみられる。京都系土師器２期に相当する。

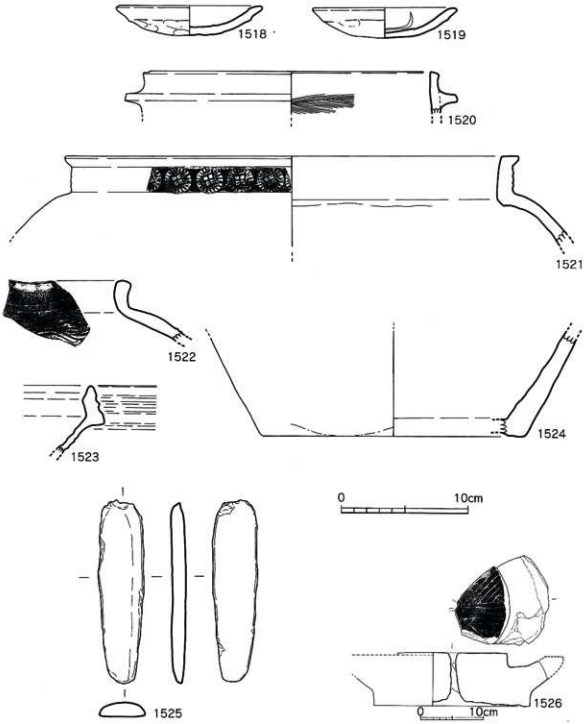
1520、1521は瓦質土器である。1520は外面に鍔状の突帯が付される鍋である。13世紀以前のものである。1521は頸部が直立し口縁部にいたるものである。口縁端部は外方に引き出され、端面は平坦である。頸部外面にはスタンプ文が連続的に施文される。16世紀代のものであろう。

1522、1523は焼締陶器備前焼である。1522は短頸壷で、頸部が短く立ち上がり口縁部にいたる。肩部には櫛描波状文がみられる。16世紀代のものであろう。1523は擂鉢で、口縁端面は内傾している。端部を上方に引き上げる際の強いナデに伴う凹みが端面にみられる。口縁帯の外面には凹線がみられる。乗岡編年の近世１期に相当する。

1524は褐釉陶器甕か。底部の資料で、体部内外面に褐釉が施されている。底面は露胎である。中国産と思われる。

1525は砥石である。断面半円形を呈し、平坦面が磨り面となっている。

1526は茶臼の下臼である。中央に芯棒穴がみられる。目は８分割と思われる。



第277図　大友75次３区道路面上出土遺物

その他の出土遺物（第278～283図）

調査区内の表土層、遺構検出時などに出土した遺物のうち主要なものを紹介する。

土師質土器　1527～1535は底部糸切り離しの土師質土器である。

坏　このうち1527～1533は坏である。1527は，底部と同じ厚みの体部が直立気味に立ち上がる。立ち上がり部はシャープで、直線的に口縁部にいたる。体部中程がわずかに膨らみ、口縁部は尖り気味である。14世紀前半代のものであろう。1528は1527に比べやや器高が低い。体部は底部と同じ厚みで立ち上がり、立ち上がり部はシャープである。体部はわずかに内湾気味に口縁部にいたり、端部は尖り気味である。14世紀前半代の所産と思われる。1529も底部と同じ厚みの体部が立ち上がる。立ち上がり部はわずかに丸みをもつ。体部は直線的に口縁部にいたる。14世紀前半代のものであろう。1531は口縁部周辺にスス状付着物がみられることから、灯火器として使用されたことが分かる。体部は底部と同じ厚みで、立ち上がりはシャープである。14世紀前半代に比定される。1532は底部より薄い体部が直線的に口縁部にいたる。体部立ち上がり部は丸みをもつ。14世紀後半代のものか。1533も体部に比し底部がやや厚い。体部立ち上がり部は丸みをもち、内湾気味に口縁部にいたる。14世紀後半代のものであろう。

小皿　1534、1535は小皿である。1534は底部から体部を垂直気味に引き上げる。口縁部は尖り気味である。14世紀後半代のものか。1535は底部と同じ厚みの体部が斜方向に立ち上がる。14世紀前半代のものか。

ロクロ土師器　1536～1538は底部糸切りで、体部にロクロ痕がみられるものである。1536は口径12.2cmを測るものである。体部は斜方向に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。体部内面下半にロクロ痕がみられる。1657は口径11.8cmで、体部は丸みをもち立ち上がる。体部内面にロクロ痕が残る。1358は復元口径10.5cmである。底部はやや厚みをもち、体部が斜方向にのびる。体部内面にロクロ痕がみられるが、口縁部付近には残らない。また、内外面の口縁部から体部にかけては、スス状付着物がみられる。灯火器として使用されたものであろう。

京都系土師器　1539～1546は京都系土師器である。このうち1539～1541は薄手のものである。口径10.0～15.0cmを測るもので、口縁部は外反する。1539と1541は灯火器として使用された痕跡であるスス状付着物がみられる。以上は京都系土師器１期に位置づけられるもので、16世紀前葉に比定される。1542～1546は前者の一群に比べ厚手のものである。京都系土師器２、３期にあたるものと思われ、16世紀中葉以降に比定される。なお、1544には内外面にスス状付着物がみられ、灯火器としての使用がうかがえる。

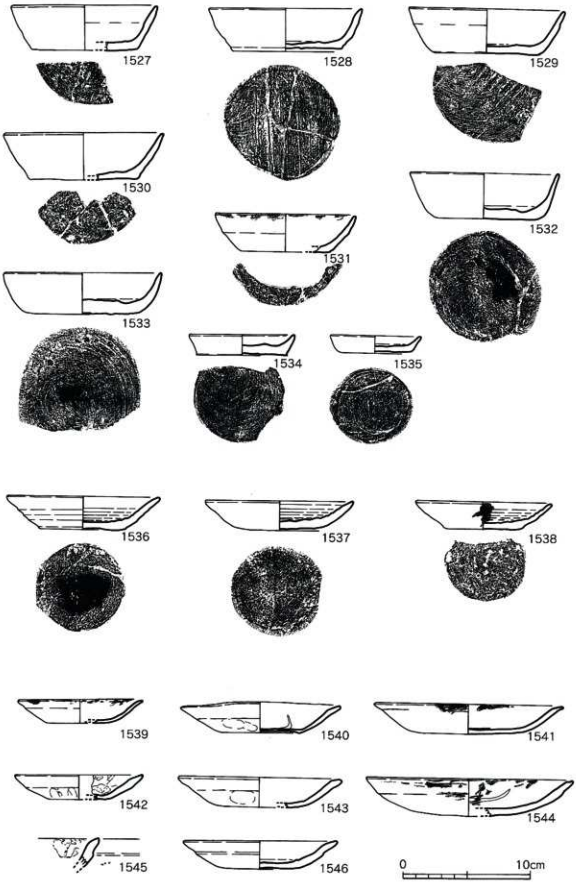
瓦質土器　1547～1555は瓦質土器である。

鍋　1547～1549は鍋である。1547、1548は口縁部が外方に折れるものである。口縁端部はわずかに摘み出される。内面には横方向のハケメが施されるが、外面はナデ等により仕上げられている。14世紀代のものである。1549は外面口縁下に鍔状の突帯が付される。本品は13世紀以前のものであろう。

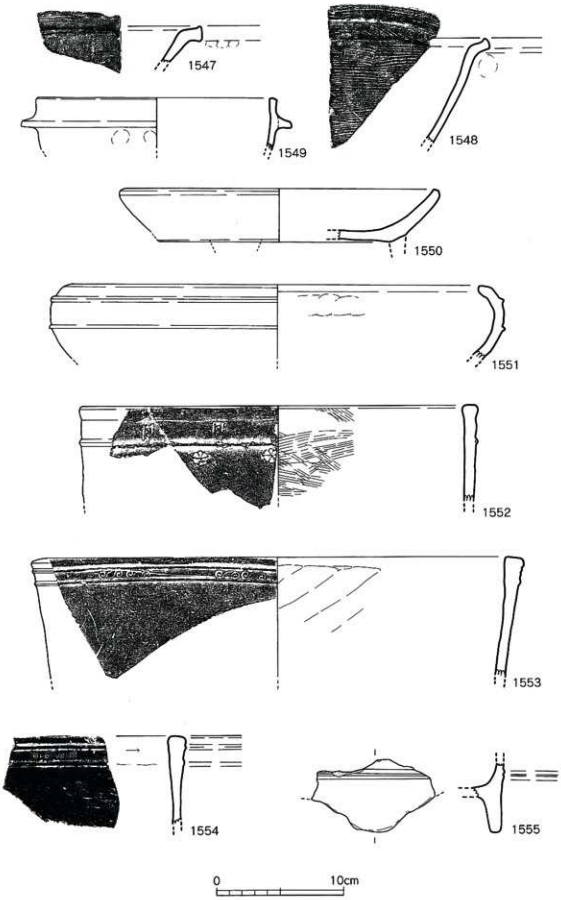
鉢　1550は鉢である。復元口径25.4cmに比し、器高が4.2cmと低い。底部には脚が付される。16世紀代のものであろう。

火鉢　1551～1555は火鉢である。1551は器高の低いもので、体部内湾する。体部最大径部分に２条の突帯が付される。15、16世紀のもの。1552～1554は円筒形の器形を呈するものである。1552は口縁部わずかに肥厚し、口縁下に低い突帯が付される。突帯の上下に各々異なるスタンプ文がみられる。1553は外面口縁下に２条の低い突帯が付される。突帯間には一定間隔でスタンプ文が施される。1554は口縁部付近が体部より厚みをもつもので、外面口縁下に低い突帯が付され、その間に雷文のスタンプ文がみられる。1555は底部資料で、板状の脚が付される。16世紀代のもの。

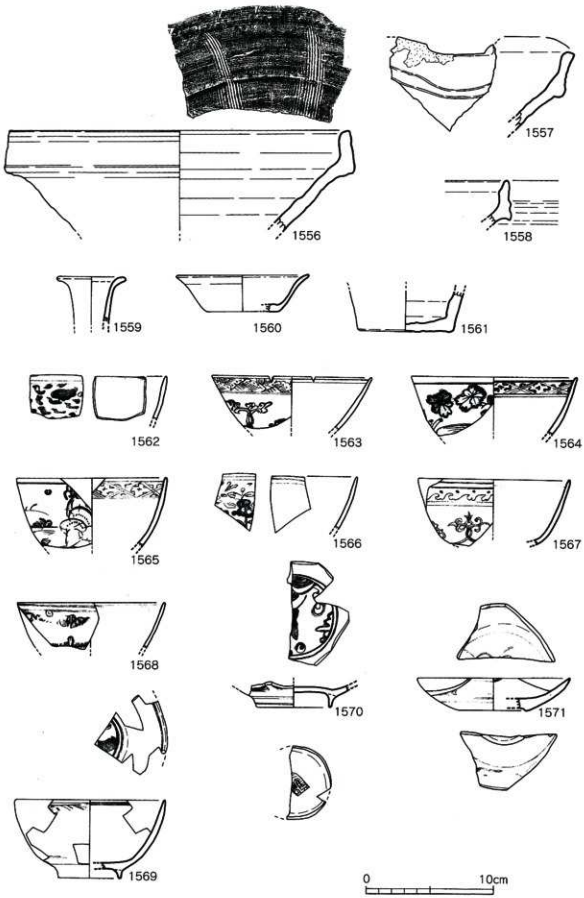
備前焼　1556～1559は焼締陶器備前焼である。



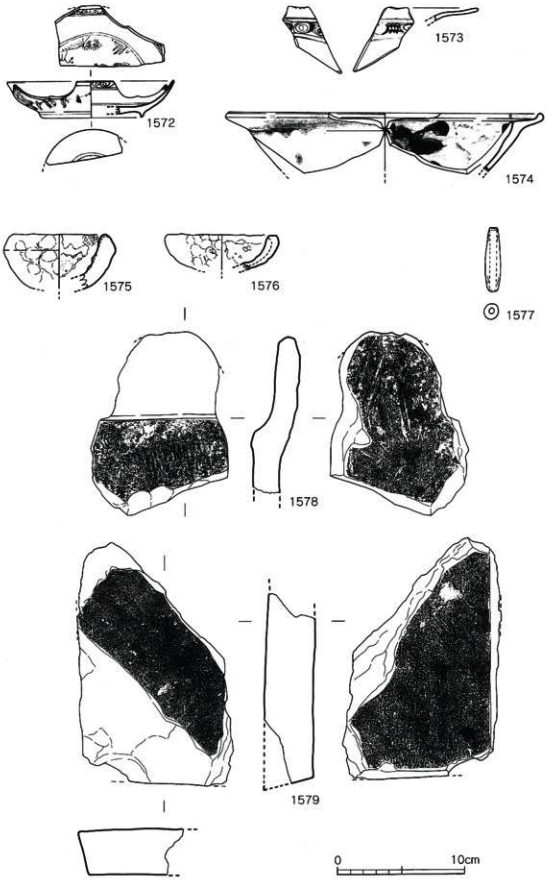
第278図　大友75次出土遺物(1)



第279図　大友75次出土遺物(2)



第280図　大友75次出土遺物(3)



第281図　大友75次出土遺物(4)

擂鉢　1556～1558は擂鉢である。1556は復元口径26.8cmを測る。口縁部はやや内傾する。端部は丸くおさめられ、口縁帯の外面には凹線などはみられない。内面の摺り目は11本単位である。乗岡編年の中世５b期に相当するもので、15世紀後葉～末に位置づけられる。1557も1556と同様な口縁形態を呈するもので、時期的にも中世５b期に位置づけられよう。1558は口縁端部が内傾ものである。端面は強いナデによりわずかに凹み気味である。口縁帯には一部凹線がみられる。中世６b期に比定されるものと思われ、16世紀前半代に位置づけられよう。

瓶　1559は瓶の口縁部である。

焼締陶器　1561は焼締陶器瓶の底部である。

中国産陶磁器　1560、1562～1574は中国産陶磁器である。

白磁　1560は口禿の白磁皿である。13、14世紀代に位置づけられる。

青花碗　1562～1573は青花で、このうち1562～1570は碗である。1562は景徳鎮窯系の碗で、小野分類の碗C群に相当する。外面は口縁下に界線２条がみられ体部全体に文様が描かれる。内面は口縁部に界線が１条みられるのみである。1563は景徳鎮窯系碗で、外面口縁部には文様帯が構成され、体部には唐草文がみられる。1564は景徳鎮窯系碗で小野分類の碗E群にあたる。外面には口縁部の界線下に花文等が描かれる。文様は、輪郭を描き、内部をダミで塗りつぶす。内面には口縁部に四方襷文がみられる。1565は景徳鎮窯系碗で、小野分類の碗E群に相当する。外面には山水図と思われるものが、輪郭を描いた後にダミで塗りつぶす手法で描かれる。内面には四方襷文が配される。1566は景徳鎮窯系碗で、草花文様が描かれる。1567は景徳鎮窯系碗で、小野分類の碗D群に相当する。体部外面にはアラベスク文様がみられる。1568は景徳鎮窯系碗で小野分類の碗E群にあたる。1569は漳州窯系碗である。体部外面及び見込み部に文様がみられる。1570は碗の底部資料である。饅頭心タイプで、小野分類の碗E群に相当する。

皿　1571～1573は皿である。1571は蕎笥底を呈するもので、漳州窯系である。1572は景徳鎮窯系皿で、小野分類の皿E群に相当する。1573はいわゆる鍔皿で、小野分類の皿F群にあたる。

華南三彩　1574は華南三彩の鉢で、復元口径25.2cmである。ボウル状の体部から口縁部が外方に折れ、端部が上方に肥厚される。

坩堝　1575、1576は土師器坩堝である。両者とも復元口径８cm前後の小型品である。1575が深めで、1576は浅い器形を呈する。

土錘　1577は土錘である。長さ５cm、最大径1.2cm、孔径0.4cmを測る。

丸瓦　1578は丸瓦である。外面にタタキ痕が残る。

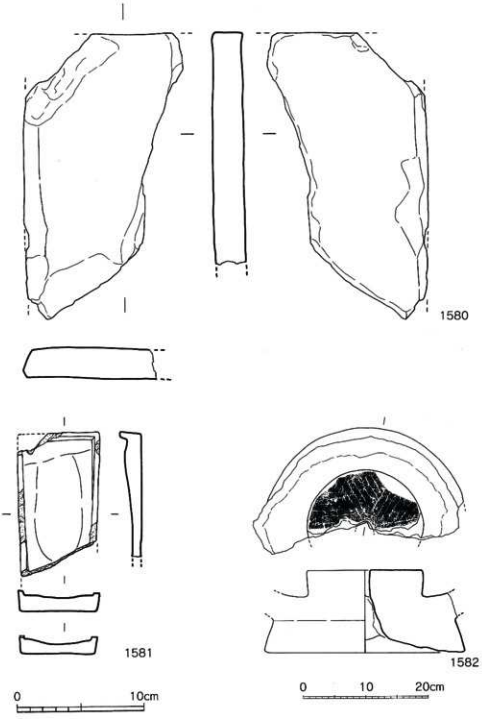
　1579、1580は塼であるが、両者とも欠損品である。

塼　1581は硯である。欠損品であるが、現存長11.3cm、幅6.5cm、厚さ1.7cmを測る。石材はオリーブ色を呈するものである。

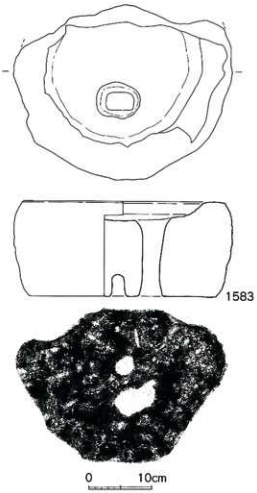
硯

茶臼　1582は茶臼の下臼である。上面の径18.6cm、底面の径32.0cm、高さ13.2cmを測る。中央に芯棒穴があり、底部は上げ底である。目は６分割と推定され、比較的整然としている。

挽臼　1583は挽臼の上臼破片資料である。天場のくぼみは約３cmで、上面観長方形の供給口が中央部からはずれた位置にみられる。高さは15.2cmで、下面の中央には芯棒受がみられる。下面はふくみが全くなく、目もほとんど観察することができない。目がなくなるまで使いこんだものであろう。



第282図　大友75次出土遺物(5)



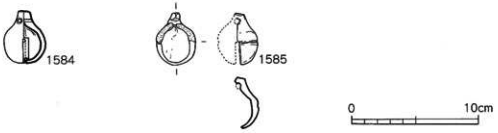
第283図　大友75次出土遺物(6)

（2）土製品

調査区の表土層や遺構検出中に出土した土製品（第284図）を紹介する。

1584は土鈴である。高さ4.1cm、最大径3.3cmを測るもので、ほぼ球形を呈する本体に紐を装着する部分が付加される。本体部分は厚さ約0.3cmで、幅0.2cm程のスリットが本体を半周するかたちで設けられる。本体外面はナデにより平滑に仕上げられており、内面にはシボリ痕が残る。紐を装着する部分は台形状を呈し、紐を装着する径0.2cmの孔が施される。孔は本体のスリット方向とは軸をやや異にする方向で穿たれている。

1585も土鈴で、ほぼ半分が残存するものである。大きさは長さ4.0cm、最大径3.2cmで、1584とほぼ同サイズであることが分かる。本体は中程に接合痕が観察されることから、上半と下半を接合して作製されているものと思われる。スリットは本体をほぼ半周している。本体の外面は平滑にされ、内面にはシボリ痕がみられる。紐を装着する孔はスリットと同方向に穿たれている。穴は径0.2cmである。



第284図　大友75次出土土製品

（3）玉類

以下で紹介する玉類（第285図）は遺構に伴わずに出土したものである。

1586は白色を呈する。径0.4cm、厚さ0.2cmで、扁平な印象を受ける。中央部に孔が穿たれている。

1587はガラス製の玉で、青緑色を呈する。一部を欠損するもので、径0.5cm、厚さ0.3cmを測るもので、やはり扁平な印象を受ける。中央部に孔が穿たれる。

1588は深緑色を呈するガラス製の玉である。径0.4cm、厚さ0.3cmでやや扁平である。中央に孔が穿たれ。

1589はガラス製の玉で、白色を呈する。径、厚さとも0.4cmで、扁平な印象はない。中央部には孔が穿たれる。

1590はガラス製の玉で、青緑色を呈する。ややいびつな形態をしている。中央に孔が穿たれるが、孔の径は均等ではなく、中程が細くなっている。

1591は水色を呈するガラス製の玉である。径0.3～0.4cmに対し厚さは0.1cmで、極めて扁平である。中央に孔が穿たれる。

1592はガラス製の玉で、青緑色を呈する。0.1～0.15cmの太さで螺旋状に巻き上げられている。芯棒にガラス紐を巻きつけ製作したことが分かる。

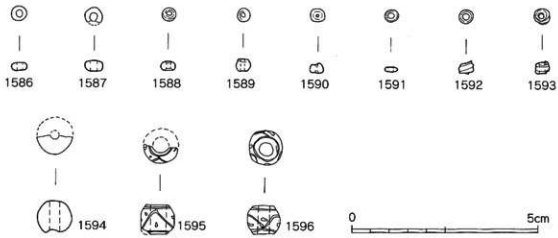
1593はガラス製の玉で、青色を呈する。1592同様に0.05～0.1cmの太さで螺旋状に巻き上げられる。

1594はガラス製の玉で、半分が欠損する。薄緑色を呈するもので、径0.9cmの球状を呈する。他のガラス玉に比べ圧倒的に大型である。

1595は白色を呈する。上面及び下面は径0.6cmで、中程が径0.9cmと膨らむ形態をなすが、半分

が欠損する。表面には文様が彫りこまれている。上端と下端に近い位置に横方向の沈線があり、上下の両沈線間に大きく波状を呈する沈線を施す。さらに、波状沈線の周囲に列点を配する。

1596は白色を呈する。1596と同様な形態で、サイズ的にもほぼ同規模である。表面には、1595と同様な文様が彫りこまれている。

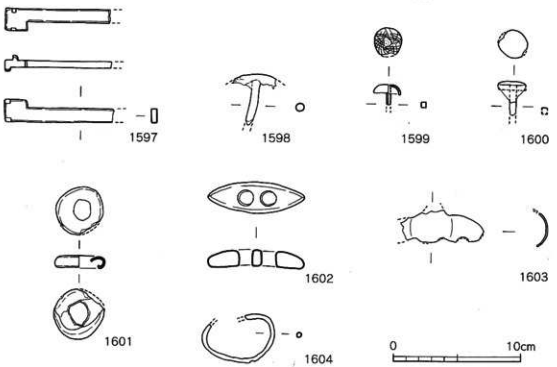


第285図　大友75次出土玉類

（4）金属製品

遺構に伴わず出土した金属製品（第286、287図）を紹介する。

1597は欠損品であるが、鍵と思われる。幅0.5cm、厚さ0.25cmの板状を呈し、端部がL字状を呈



第286図　大友75次出土金属製品(1)

する。L字状部分は幅0.9cmの正方形を呈する。さらに正方形部分では、上下に0.3cm程の突起がみられる。

1598は銅製の鋲で、傘状の形態を呈する。頭部は一部が欠損するが、円形を呈すると思われる。径1.7cm以上の大きさであったことが分かる。長さは現状で2.1cmを測るが、先端部を欠いている。針の部分の断面は円形で、径0.3cmである。

1599は甲冑の装飾である八双金物をとめた銅製八双鋲である。現存長0.8cm、頭部径1.1cmを測り、表目に細かな線刻による文様が施される。針の部分は断面方形で、一辺0.2cmである。

1600も銅製の鋲である。断面T字状を呈するものであるが、先端部を欠く。頭部は径1.1cmの円形である。針部の断面は方形で、一辺0.25cmを測る。

1601は銅製である。器種は不明であるが、鋲の頭部の可能性をもつ。径1.9cmの円形を呈するが、中央部を欠損する。上面は平坦で、端部は下方に折り曲げられる。高さは0.4cmである。

1602は銅製の笠金である。平面形は両端が尖るもので、長さ3.8cm、幅1.3cmを測る。2個の穴がみられ、穴の径は0.6cmを測る。厚みは0.4～0.6cmで、中央部が厚い。全体に緩やかに湾曲している。表面に一部鍍金の痕跡がみられることから、金銅製であったと思われる。

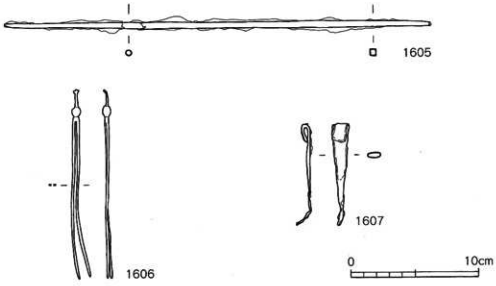
1603は不明銅製品である。欠損品であるが、不定形を呈すると思われる。厚さ0.05cmと薄く湾曲する。飾り金具の可能性をもつ。

1604は銅製品である。両端を欠くものであるが、断面は円形を呈し、径0.2cmを測る。銅線あるいは棒状の製品であったことが考えられる。

1605は鉄製品である。断面は方形ないしは円形を呈し、径は0.3～0.4cmを測る。両端が細くなる特徴を有する。長さは34cmである。

1606は銅製の簪である。球状の部分から下は二又になり長くのびる。

1607は不明銅製品である。板状を呈するものであるが、一方の端部に向かうにつれ細くなる。反対側は折り畳んだような状態になっている。



第287図　大友75次出土金属製品(2)

(5) 銭貨

出土銭貨について、遺構内から出土の銭貨及び遺構に伴わず出土の銭貨を併せて一括して紹介する（第3表、第288～292図）。銭は621年初鋳の「開元通寶」から1408年初鋳の「永楽通寶」までみられるが、その大半は宋銭で占められている。以下、複数枚出土の遺構について、その概要を述べる。

SK012からは6枚が出土している。SK012は近世まで下る大型廃棄土坑で、他の遺物とともに流れ込みの状況で検出された。

SK048は14世紀代の土坑である。「開元通寶」など3枚が出土している。

SK153は16世紀後～末の大型土坑と思われるものである。「元〇通寶」など5枚の出土が確認されているが、うち4枚は重なって付着している。本来的には緡銭であった可能性をもつ。

SK178は16世紀代の土坑で、「景徳元寶」など4枚が出土している。

SE206は16世紀後～末の井戸である。「開元通寶」など3枚が出土している。このうち、2枚は重なって付着している。本来的には緡銭であった可能性をもつ。

SK210は14世紀代に比定される小土坑である。「熙寧元寶」など3枚が出土しているが、いずれも流れ込みの状態である。

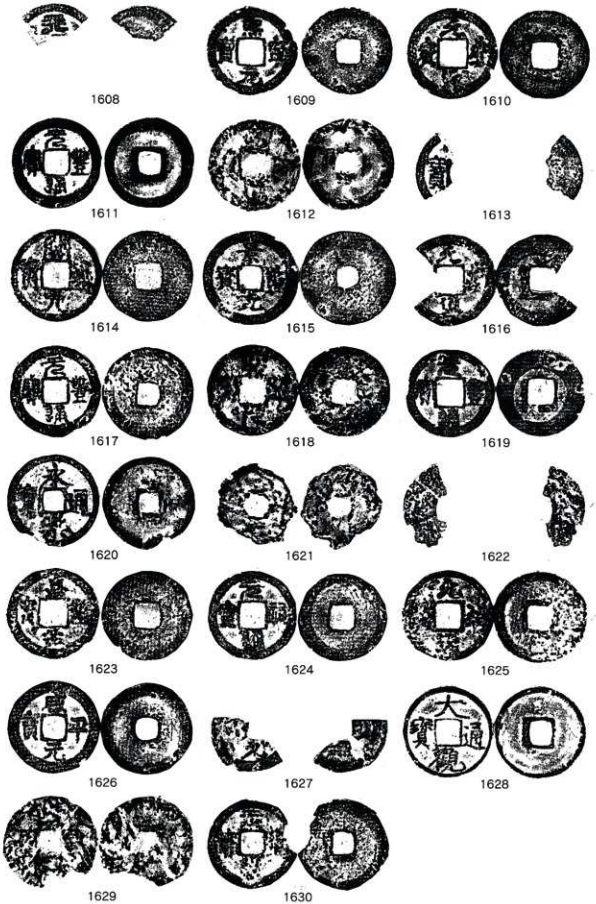
SK445は16世紀中葉に位置づけられる不定形の大型土坑である。多くの遺物が出土しているが、いずれも流れ込みの状態である。本土坑からは、開元通寶」など6枚が出土している。

SP706は14世紀代に比定される柱穴である。「皇宋通寶」など2枚が出土している。本柱穴が建物を構成するものではないが、地鎮などに係わる埋納である可能性もある。

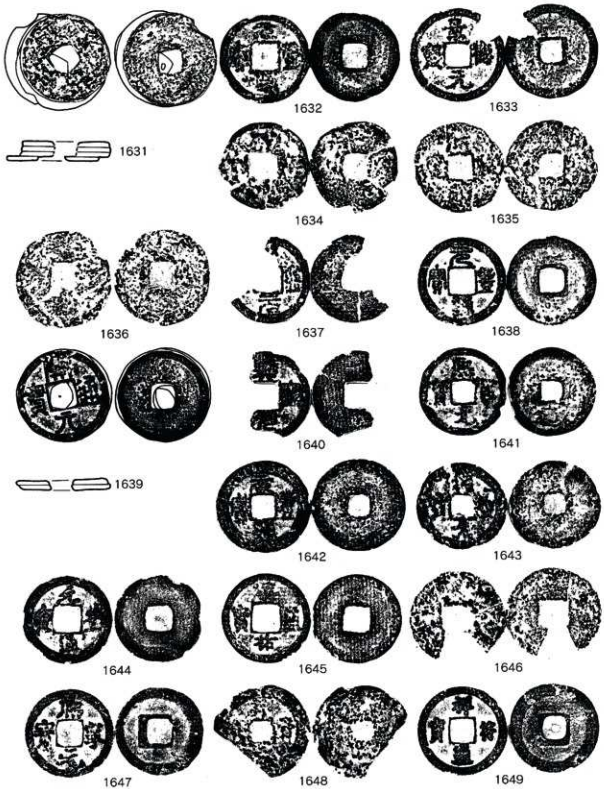
第3表　大友75次出土銭貨一覧表

No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(cm)	書体	出土遺構名	備　考
1608	天〇〇〇	－	－	0.6	－	－	SK012	欠損品
1609	熙寧元寶	1068年	北宋	2.8	2.4	真書	SK012	
1610	元豊通寶	1078年	北宋	2.0	2.4	行書	SK012	
1611	元豊通寶	1078年	北宋	2.8	2.4	篆書	SK012	
1612	－	－	－	1.2	2.4	－	SK012	変形、判読不能
1613	〇〇〇寶	－	－	0.7	－	－	SK012	欠損品
1614	開元通寶	621年	唐	1.9	2.4		SK048	
1615	景祐元寶	1034年	北宋	2.2	2.5	真書	SK048	
1616	元豊通寶？	1078年	北宋	1.7	2.4	行書	SK048	一部欠損、「元豊通〇」
1617	元豊通寶	1078年	北宋	2.5	2.4	篆書	SD049	
1618	熙寧元寶	1068年	北宋	2.3	2.4	篆書？	SK054	
1619	元豊通寶	1078年	北宋	2.0	2.5	篆書	SK054	
1620	永楽通寶	1408年	明	2.0	2.4		SK054	
1621	－	－	－	1.7	－	－	SK054	一部欠損、判読不能
1622	－	－	－	0.6	－	－	S085	欠損品
1623	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.7	2.4	真書	SK095	
1624	元祐通寶	1086年	北宋	3.0	2.4	篆書	SK095	
1625	元祐通寶	1086年	北宋	2.4	2.4	行書	SK096	
1626	咸平元寶	998年	北宋	2.4	2.4	真書	SD103	
1627	〇〇元寶	－	－	0.6	－		SK106	欠損品、一部判読可能
1628	大観通寶	1107年	北宋	1.7	2.4	真書	SE149	
1629	－	－	－	2.8	2.4	－	SE149	一部欠損、判読不能
1630	元〇通寶	－	－	2.5	2.4	－	SK153	一部欠損、判読不能
1631	－	－	－	12.2	2.3～2.4	－	SK153	4枚が付着、判読不能、他3枚銭貨名不明
1632	元豊通寶	1078年	北宋	2.5	2.4	篆書	SE170	
1633	景徳元寶	1004年	北宋	2.2	2.5	真書	SK178	
1634	－	－	－	2.4	2.4	－	SK178	判読不能
1635	－	－	－	2.0	2.4	－	SK178	判読不能
1636	－	－	－	2.2	2.4	－	SK178	判読不能
1637	熙寧元寶？	1068年	北宋	1.4	2.4	篆書	SK194	一部欠損、「〇寧元〇」
1638	元豊通寶	1078年	北宋	2.8	2.4	篆書	SK194	
1639	開元通寶	621年	唐	1.8	2.4		SE206	2枚付着、1枚は銭貨名不明
1640	熙寧元寶？	1068年	北宋	1.5	2.4	篆書	SE206	一部欠損、「熙寧元〇」
1641	熙寧元寶	1068年	北宋	2.7	2.4	真書	SK210	
1642	元豊通寶	1078年	北宋	2.4	2.4	篆書	SK210	

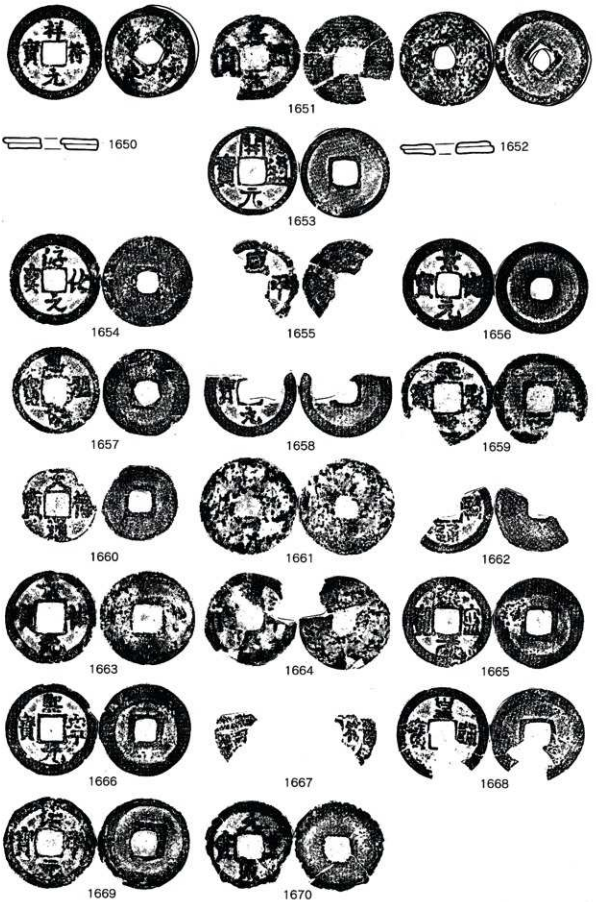
No	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(cm)	書体	出土遺構名	備　　考
1643	○○○寶	－	－	2.6	2.4	－	SK210	一部判読不能
1644	元豊通寶	1078年	北宋	2.2	2.4	行書	SE216	
1645	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.0	2.4	真書	S251	
1646	－	－	－	2.2	2.4	－	SK266	一部欠損、判読不能
1647	熙寧元寶	1068年	北宋	1.6	2.4	真書	SK291	
1648	－	－	－	1.9	2.4	－	SK302	一部欠損、判読不能
1649	祥符通寶	1009年	北宋	1.8	2.3	真書	SK364	
1650	祥符元寶 元祐通寶	1009年 1086年	北宋 北宋	6.6	2.5 2.4	真書 篆書	S411	2枚付着
1651	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.3	2.4	真書	S411	一部欠損
1652	－	－	－	5.7	2.5	－	S433	2枚付着、判読不能
1653	開元通寶	621年	唐	2.3	2.4		SK445	
1654	淳化元寶	990年	北宋	2.4	2.4	行書	SK445	
1655	咸平元寶？	998年	北宋	0.8	－	真書	SK445	一部欠損、「咸平○○」
1656	景德元寶	1004年	北宋	3.3	2.4	真書	SK445	
1657	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.5	2.3	篆書	SK445	
1658	○○元寶	－	－	1.5	2.4	－	SK445	欠損品
1659	天聖元寶	1023年	北宋	1.4	2.4	真書	SK447	一部欠損
1660	天禧通寶	1017年	北宋	1.0	2.0	真書	S453	一部欠損
1661	－	－	－	3.5	2.5	－	SK536	判読不能
1662	－	－	－	3.5	2.5	－	SK601	一部欠損、「○○通○」（篆書）
1663	景祐元寶	1034年	北宋	2.9	2.5	真書	SK614	
1664	－	－	－	1.9	2.4	－	S626	一部欠損、判読不能
1665	熙寧元寶	1068年	北宋	2.0	2.4	篆書	SK627	
1666	熙寧元寶	1068年	北宋	2.7	2.4	真書	SK631	
1667	○祥○○	－	－	－	－	真書	SP706	欠損品、「祥符通寶」又は「元符通寶」
1668	皇宋通寶？	1038年	北宋	1.5	2.2	篆書	SP706	一部欠損、「皇○通寶」
1669	治平元寶	1064年	北宋	1.9	2.4	真書	1区G61	
1670	元豊通寶	1078年	北宋	1.3	2.4	行書	1区F61	
1671	元祐通寶	1086年	北宋	6.3	2.4	篆書	1区F61	2枚付着、1枚は銭貨名不明
1672	元祐通寶	1086年	北宋	2.7	2.4	篆書	1区F61	
1673	元豊通寶？	1078年	北宋	1.4	2.5	篆書	1区F61	一部欠損、「○豊通寶」
1674	紹聖元寶	1094年	北宋	1.9	2.4	行書	1区F61	
1675	元豊通寶	1078年	北宋	2.5	2.4	行書	1区F61	一部欠損
1676	熙寧元寶	1068年	北宋	3.1	2.5	篆書	1区F61	
1677	太平通寶	976年	北宋	2.6	2.4	真書	1区F61	
1678	祥符通寶	1009年	北宋	2.2	2.4	真書	1区	
1679	天禧通寶	1017年	北宋	1.5	2.4	真書	1区	一部欠損
1680	－	－	－	0.7	－	－	2区F62	欠損品、「○元○寶」又は「○○元寶」
1681	熙寧元寶	1068年	北宋	2.2	2.5	真書	2区F61	
1682	政和通寶	1111年	北宋	2.6	2.6	真書	2区G62	
1683	熙寧元寶	1068年	北宋	2.8	2.5	真書	3区G63	
1684	元豊通寶	1078年	北宋	1.3	2.4	篆書	№80	
1685	元祐通寶？	1086年	北宋	1.7	2.4	篆書	№87	一部欠損、「○祐通○」
1686	開元通寶	621年	唐	2.8	2.4	真書		
1687	熙寧元寶	1068年	北宋	2.9	2.4	真書	3区東側	
1688	元符通寶	1098年	北宋	3.7	2.4	篆書	撹乱一括	
1689	元祐通寶	1086年	北宋	2.5	2.4	篆書		
1690	淳化元寶？	990年	北宋	1.5	－	真書	3区東側	一部欠損、「淳○○寶」
1691	政和通寶？	1111年	北宋	1.5	2.4	篆書	1面目盤下げ	一部欠損、「○○和○」
1692	熙寧元寶	1068年	北宋	2.6	2.3	真書	2区	
1693	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.5	2.3	真書	2区2目目盤下げ	
1694	元豊通寶	1078年	北宋	3.1	2.3	行書		
1695	○○通寶	－	－	3.0	2.4			判読不能
1696	皇宋通寶	1038年	北宋	1.9	2.4	真書	1面目盤下げ	
1697	熙寧元寶	1068年	北宋	3.8	2.4	篆書	2面目盤下げ	
1698	－	－	－	2.6	2.3	－	2区	判読不能
1699	元祐通寶？	1086年	北宋	1.0	2.4	篆書	2区	一部欠損、「○○通寶」
1700	－	－	－	3.1	2.4	－	2区	判読不能
1701	祥符通寶？	1009年	北宋	1.7	2.5	真書	2区	「祥符○寶」
1702	元豊通寶	1078年	北宋	2.9	2.4	篆書	2区	
1703	皇宋通寶	1038年	北宋	2.6	2.5	真書	2区	
1704	開元通寶	621年	唐	2.8	2.4		2区	
1705	－	－	－	3.2	2.4	－	2区	判読不能
1706	元祐通寶？	1086年	北宋	1.4	2.4	篆書	1区	
1707	祥符通寶	1009年	北宋	0.9	1.8	真書		一部欠損
1708	治平元寶	1064年	北宋	2.5	2.3	真書		
1709	○元通寶	－	－	1.6	2.1	－		判読不能
1710	－	－	－	2.9	2.4	－	№75	判読不能
1711	皇宋通寶	1038年	北宋	2.4	2.4	篆書	№97	
1712	－	－	－	5.5	2.4～2.5	－	№89	2枚付着、本来は104と3枚重ね、判読不能



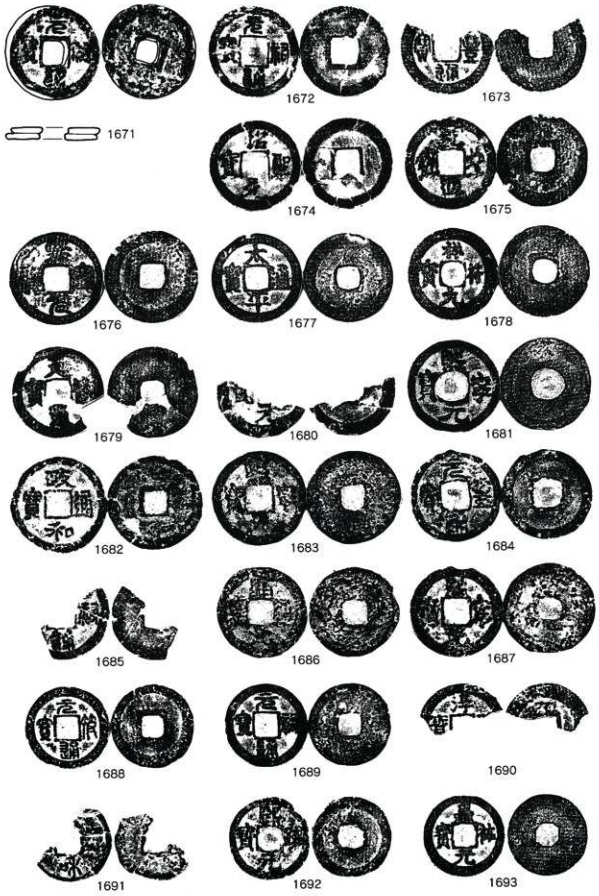
第288図　大友75次出土銭貨(1)



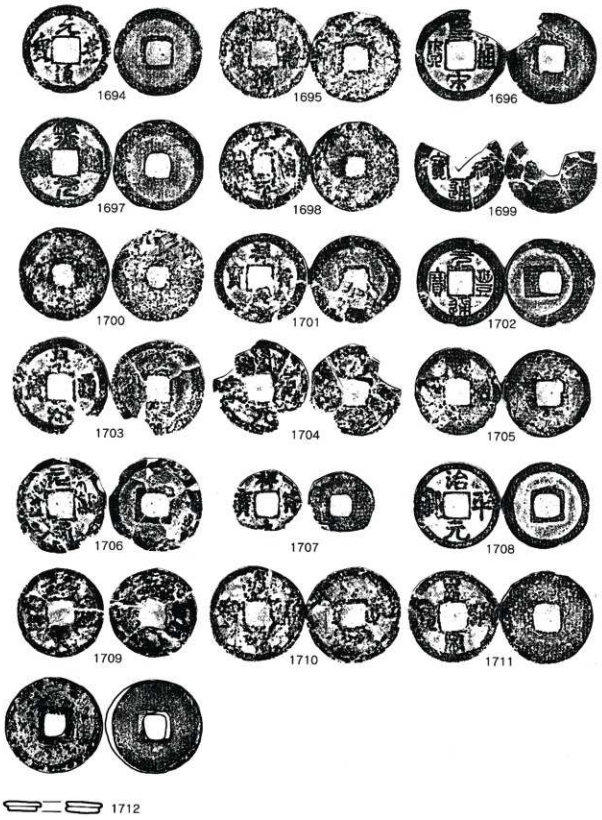
第289図　大友75次出土銭貨(2)



第290図　大友75次出土銭貨(3)



第291図　大友75次出土銭貨(4)



第292図　大友75次出土銭貨(5)

（6）古代以前の土器

中世遺構などから出土した古代以前の遺物（第293図）について紹介する。

1713は外面口縁下に刻目突帯が貼り付けられた深鉢である。口縁はわずかに内傾し、端部は丸くおさめられる。

1714は弥生時代後期終末前後に比定される安国寺式土器壷である。二重口縁を呈するもので、口縁部は強く内傾する。外面には櫛描波状文がみられる。

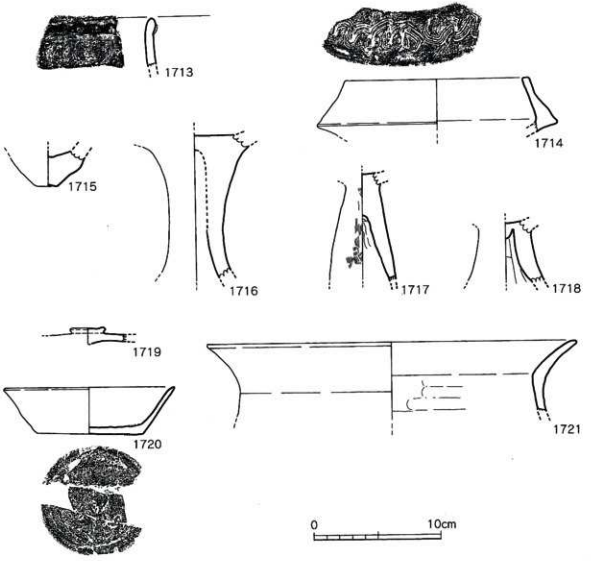
1715は弥生時代後期後半の粗製甕の底部である。小さな平底が残るもので、底部はわずかに上げ底状を呈する。

1716～1718は高坏の脚部である。1718には坏部との接合部に円盤充填痕が残る。弥生時代終末～古墳時代にかけてのものである。

1719は須恵器坏蓋である。頂部に円形の扁平な摘みが付される。８世紀代のものである。

1720は土師器坏である。底部は回転ヘラ切りで、復元口径13.6cmを測る。体部にヘラミガキはみられない。８～９世紀代のものである。

1721は土師器甕である。口縁部は大きく外反する。8,9世紀の所産であろう。



第293図　大友75次古代以前の遺物

第３節　まとめ

75次調査区からは土坑、井戸、溝、竪穴建物などの遺構とともに多くの遺物が出土した。時期的には14世紀代と16世紀代の遺物が確認された。出土遺構の位置づけ等については、隣接する41次、69次、77次調査区の成果と併せて報告されているので、そちらを参照願いたい。

ここでは、本調査区で確認された竪穴建物について若干の考察を行なう。

１　中世の竪穴建物について　－大分県下の例から－

１

竪穴建物とは、竪穴という半地下構造の施設を伴う建物である。全国各地において広く確認されており、その構造や性格についての議論が行なわれている（註１）。

大分県下の一般集落においては、９世紀以降、掘立柱建物が一般的となるが、中世にいたり竪穴建物が散見されるようになる。しかし、竪穴建物は掘立柱建物に比べその数は圧倒的に少ない。そのため、竪穴建物の機能と集落内における位置づけが注目されるところである。本稿では、大分県下における竪穴建物の集成を行い、それらから竪穴建物の構造、編年、系譜、性格などの検討を行なう。

２

中世における大分県下の竪穴建物は、管見によれば16遺跡25例が知られている（第294図）。ここでは、各遺跡の竪穴建物の概要を述べるとともに、若干の類似遺構についても紹介する。

１古庄屋遺跡（第295、296図）

古庄屋遺跡（註２）は中津市本耶馬渓町に所在しており、山国川の支流である跡田川と西谷川が合流する地点に位置する。背後には丘陵があり、川と丘陵に囲まれた要害の地となっている。遺跡の主体となる時期は12世紀末から14世紀中～後葉で、溝、川、丘陵で囲まれた一辺１町クラスの規模に匹敵する居館である。

竪穴建物は４基が確認されている。これらは掘立柱建物群の東南に位置し、ほぼ同位置で重複しながら連続して構築されており、居館内での空間利用が継続的に踏襲されていることが分かる。これらの平面形は方形であるが、切り合いの関係から、規模の明らかにできるものは竪穴１と竪穴３である。

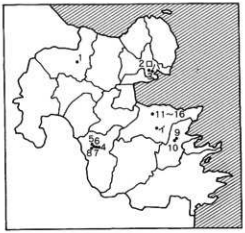
①　竪穴１は長辺８m、短辺７mの方形を呈し、深さは0.2mである。床面は平坦で、柱穴が約10本みられる。しかし、柱穴は不規則な配置で、本竪穴建物に伴わないことも考えられる。時期は13世紀後葉である。

③　竪穴３は長辺6.5m、短辺５mの方形で、深さは0.2mである。床面は平坦で柱穴が多数みられるが、配置に規格性が認められず、本竪穴建物に伴うか定かではない。壁に沿い幅0.2～0.4m、深さ0.1mの溝が巡る。時期は13世紀後葉である。

２八坂中遺跡（第296図）

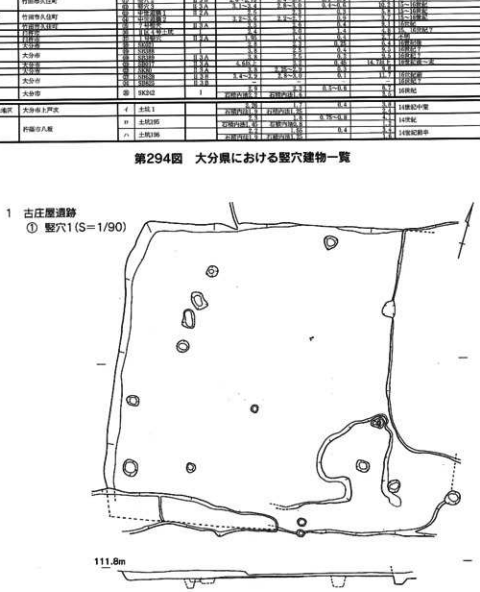
八坂中遺跡（註３）は別府湾に面する国東半島南部の杵築市に所在する。下流域で蛇行する八坂川の右岸に位置し、若干の断絶があるものの遺跡は11世紀後半～16世紀までの間存続している。八坂川下流域は宇佐宮弥勒寺領荘園である八坂荘となっており、遺跡は荘園の表玄関的役割を担う中核的な拠点遺跡であったと考えられる。

⑤　竪穴２は、13世紀後半～14世紀初のものである。周辺にみられる同時期の溝や掘立柱建物と方向を同じにすることから密接な関係がうかがえる。平面形は長方形を呈し、長辺3.8m、短辺2.8

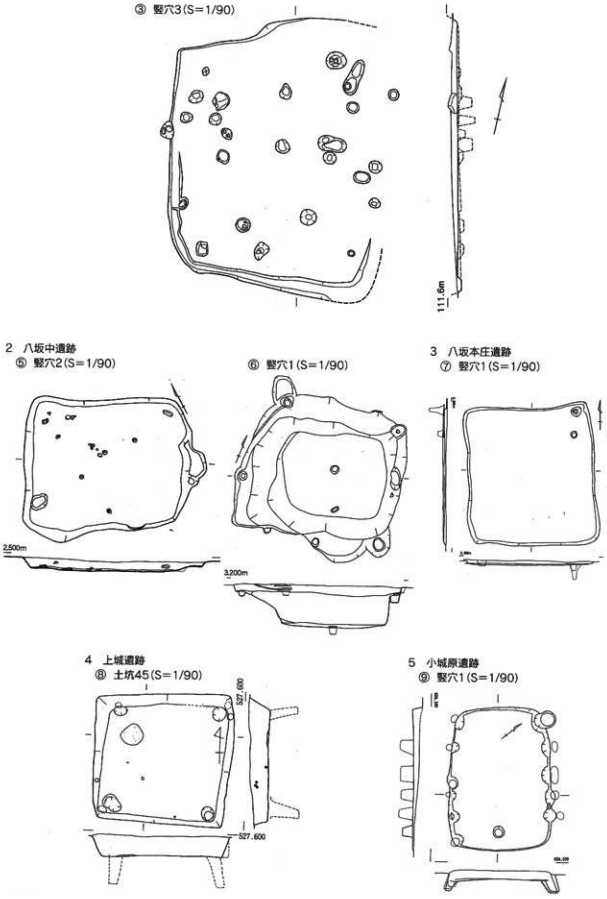


	遺跡名	所在地	遺構名	分類	竪穴規模(m) 長径	短径	深度	面積	時期	備考
1	古庄屋遺跡	中津市本耶馬渓町	(1) 竪穴1	I	8.9	7.8	-	56.0	1世紀前半	
			(2) 竪穴2	I					1世紀前半	
			(3) 竪穴3	I	6.5	5.9	0.3	33.3	1世紀前半	周溝あり
			(4) 竪穴4	I					1世紀前半	
			(5) 竪穴5	I	5.5	4.4～5.1	0.3	19.1	1世紀前半～1世紀中頃	入口施設あり
2	八坂小原遺跡	杵築市八坂	(6) 竪穴1	II A	5.3～5.7	4.7～5.1	0.3～0.5	24.0	1世紀前半	
			(7) 竪穴2		7.0	5.7		30.0	1世紀前半	
3	八坂北谷遺跡	杵築市八坂	(8) 竪穴1	I	5.1	4.1	0.1～0.3	5.1	不明	
4	上城遺跡	竹田市大字長湯	(9) 竪穴1	II B	5.5	4.1	0.1～0.3	5.1	1～2世紀	
5	白鹿原遺跡	竹田市久住町	(10) 竪穴1	II B	6.5	5.5	0.1～0.3	10.1	1世紀	
6	中原遺跡	竹田市久住町	(11) 竪穴1	II B	5.5～6.25	4.4～5.1	0.1～0.3	6.3	1～2世紀	
			(12) 竪穴2	II B	5.1～5.4	4.4～5.1	0.1～0.3	10.6	1～2世紀	
			(13) 竪穴3	II A		4.4～5.1	0.1	5.1	1～2世紀	
7	都野原遺跡	竹田市久住町	(14) 中原遺跡1	II A	5.5～5.7	4.4～5.1	0.1	5.1	1～2世紀	入口構造あり
			(15) 中原遺跡2					5.1	1～2世紀	
8	中尾駅遺跡	竹田市大字田中	(16) 竹田駅1	II A	5.1	4.1	0.1	5.1	1世紀	
9	上田駅遺跡	竹田市	(17) 上田駅1～16		4.1～5.1	4.1～5.1	0.1	5.1	1世紀前半～2	周溝あり
10	原生田遺跡	竹田市	(18) 上田駅17	II A	5.1	4.1	0.1	5.1	不明	
11	中尾遺跡	大分市	(19) 中尾遺跡1		5.1	4.1	0.1	5.1	1世紀後半	周溝計測
12	大友13次	大分市	(20) 13SD1		5.1	4.1	0.1	5.1	1世紀前半	
			(21) 13SD2	II A	5.1	4.1	0.1	5.1	1世紀前半	
13	大友18次	大分市	(22) 18SD1	II A	5.5～6.5	4.1～5.1	0.1	16.7～21.1	1世紀末～2世	
14	大友26次	大分市	(23) 26SD1	II A	5.1	4.1	0.1	5.1	不明	
15	大友75次	大分市	(24) 75SD1	II A	5.4～5.5	4.1～5.1	0.1	11.1	1世紀前半	
			(25) 75SD2	II A					1世紀前半	周辺建物跡
16	大友41次	大分市	(26) 41SD2	I	5.1	4.1	0.1～0.4	5.1	1世紀	掘立柱建物
					約現在調査	約現在調査		5.1		
17	柿元遺跡久保地区	大分市上戸次	イ 土坑1		約現在調査	約現在調査	0.4	5.1	11世紀中頃	石組みと石敷き
			ロ 土坑2		約現在調査	約現在調査	0.7～0.8	5.1	11世紀	石組みと石敷き
			ハ 土坑3		約現在調査	約現在調査	0.4	5.1	11世紀前半	石組みと石敷き

第294図　大分県における竪穴建物一覧



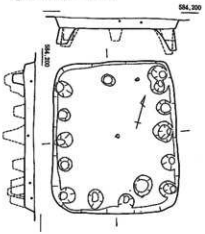
第295図　大分県下の竪穴建物(1)



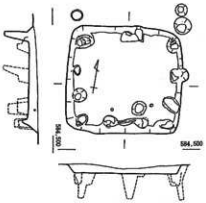
第296図　大分県下の竪穴建物(2)

6　中原遺跡

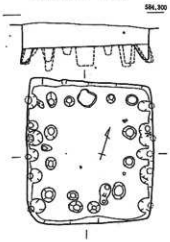
⑩　竪穴1(S＝1/90)



⑪　竪穴2(S＝1/90)

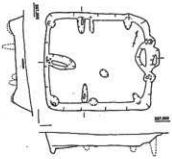


⑫　竪穴3(S＝1/90)

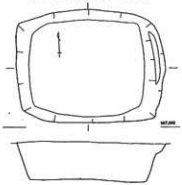


7　都野原田遺跡

⑬　中世遺構1(S＝1/90)

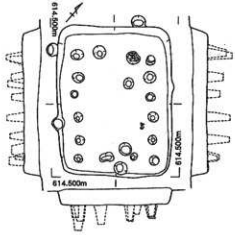


⑭　中世遺構2(S＝1/90)



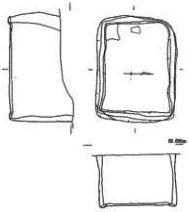
8　上屋敷遺跡

⑮　7号竪穴(S＝1/90)



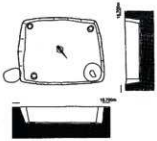
9　野村台遺跡

⑯　Ⅱ区4号土坑(S＝1/90)



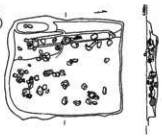
10　清太郎遺跡

⑰　1号竪穴(S＝1/90)

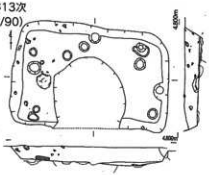


第297図　大分県下の竪穴建物(3)

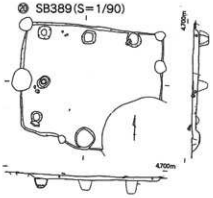
11　中世大友府内跡9次
⑱ SK021(S=1/90)



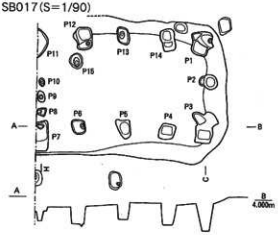
12　中世大友府内跡13次
⑲ SB388(S=1/90)



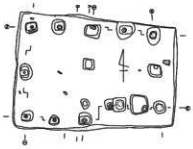
⑳ SB389(S=1/90)



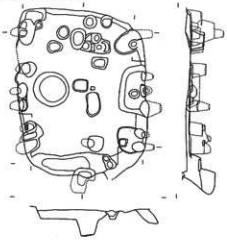
13　中世大友府内跡18次西
㉑ SB017(S=1/90)



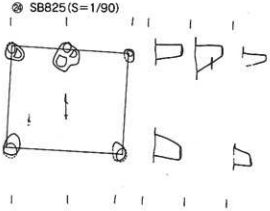
14　中世大友府内跡55次
㉒ SK80(S=1/90)



15　中世大友府内跡75次
㉓ SB628(S=1/90)

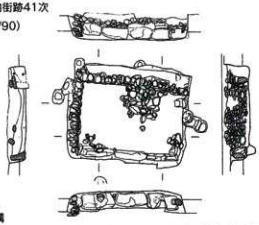


㉔ SB825(S=1/90)

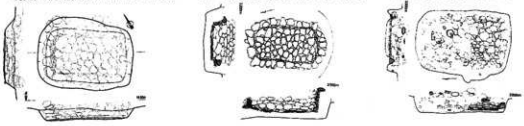


第298図　大分県下の竪穴建物(4)

16　中世大友府内街跡41次
㉘SK242(S=1/90)



17　その他の遺構
イ　利光遺跡久保地区土坑1(S=1/90)　ロ　八坂中遺跡土坑195(S=1/90)　ロ　八坂中遺跡土坑196(S=1/90)



第299図　大分県下の竪穴建物(5)

～3.2mを測る。深さは0.2mで、床面は平坦である。床面には浅い柱穴が少数みられるが、本竪穴建物に伴わないと思われる。東側の短辺中央が凸字状に突出し階段状になっていることから、出入口の施設であった可能性が考えられる。

⑥　竪穴1は16世紀の所産である。居館3の北側溝に沿うようにみられる道路状の空間をはさみ、方位を居館と同じくしてみられる。平面形は長方形で、竪穴の下端で長辺.2.6m、短辺2.0mを測る。深さは0.9～1.0mで床面は平坦である。柱穴は床面中央の1本に加え、竪穴掘り込み部の肩にみら
れる。掘り込み部にみられる柱穴は、竪穴の四隅に対応する位置と一部の辺中央に配置される。

3　八坂本庄遺跡（第296図）

八坂本庄遺跡（註4）は、先に紹介した八坂中遺跡のやや下流の八坂川左岸に位置する。遺跡は11世紀末～12世紀後半、14世紀前半、16世紀の遺構が確認されている。11世紀末～12世紀後半の集落は、条里水田の中に突然出現する。大型の掘立柱建物に加え、畿内産瓦器や吉備系土師器椀などもみられることから、川を利用した水上交通と直結した遺跡であると考えられる。12世紀後半以降は再び水田化され、14世紀、16世紀は散発的で小規模な集落がみられる。

⑦　竪穴1は方形を呈するもので、3.3×3.0mの規模を有する。深さは0.05～0.1mである。床面は平坦で、東北隅に柱穴がみられるが、本竪穴建物に伴なうものか不明である。出土遺物がないため時期は不明であるが、遺構の方位などからみて、本遺跡の主体である11世紀末～12世紀後半に比定される可能性もある。

4　上城遺跡（第296図）

上城遺跡（註5）は竹田市久住町に所在する。時期的には13世紀～14世紀後半に位置づけられるもので、75×50mの溝に囲まれた領主クラス以上の居館であると考えられている。

⑧　土坑45は、長辺3.2m、短辺3.1mの方形を呈する。深さは0.5mで床面は平坦である。床面の四隅に柱穴が配されている。柱穴は外方向に斜めに掘られており、柱を立てると中心に4本が集

まる構造を呈する。居館を画する溝や掘立柱建物と同方位を呈することから、居館に伴うものであると思われる。

5　小城原遺跡（第296図）

小城原遺跡（註６）は竹田市久住町に所在する。15、16世紀に位置づけられるもので、北部地区、南部地区の２グループに分かれて遺構がみられる。北部地区では長辺25.5m、短辺15mの長方形区画溝などがあり、一定レベル以上の屋敷であった可能性が考えられる。

⑨　竪穴は長方形を呈し、長辺3.4m、短辺2.4m、深さ0.2～0.05mを測る。床面は平坦であり、両長辺の壁際と南側中央部の短辺寄りに柱穴がみられる。両長辺の柱穴は南側が６本、北側が５本であるが、いずれも外方向に斜めに掘られている。本竪穴遺構は南部地区に位置し、概ね掘立柱建物と同方位を示す。16世紀代のものと考えられている。

6　中原遺跡（第297図）

中原遺跡（註７）は竹田市久住町に位置する。竪穴建物３基のほか土壙墓や多数の柱穴が確認されている。遺跡は、15、16世紀代に位置づけられる。

⑩　竪穴１は長辺3.5m、短辺2.7～3.0mを測る長方形を呈する。深さは0.2mで、床面は平坦である。両長辺の壁際に各々５本づつの柱穴が対をなし、加えて両短辺にも各々１本、３本を配する。両長辺に配された柱穴は外方向に斜めに掘られている。遺構内からは15、16世紀の土器のほかに、鉄滓が出土している。

⑪　竪穴２は長辺2.6～2.75m、短辺2.4～2.5mの方形にちかい長方形を呈する。深さは0.1～0.2mで、床面は平坦である。柱穴は四隅に加え、北辺に１本、他の３辺に２本柱穴が配されている。柱穴はいずれも外方向に斜めに掘り込まれている。15、16世紀代に位置づけられる。

⑫　竪穴３は竪穴２の北側1.5mに平行して構築されている。長辺3.1～3.4m、短辺2.8～3.0mの長方形を呈するもので、深さ0.4～0.6mを測る。床面は平坦で、両長辺の壁際に各々６本づつの柱穴が外方向に斜めに掘られている。加えて、壁から少し内側に入った位置に、四周に沿うように垂直に掘られた柱穴が配される。15世紀代に位置づけられる土器と鉄滓が出土している。

7　都野原田遺跡（第297図）

都野原田遺跡（註８）は竹田市久住町に所在する。B区東側において、竪穴建物と柱穴群が確認された。比較的小規模な遺跡で、15、16世紀代に比定される。

⑬　中世遺構１は長辺2.5m、短辺2.3mの方形にちかい長方形を呈する。深さは0.3mである。西側辺中央部に階段状の施設があり、その両脇には一対の柱穴が伴う。出入口の施設であろう。床面は平坦で、四隅に浅い柱穴がみられる。また、壁から中央に向かい浅い溝状の掘り込みが施される。内部の区画等に係わるものであろう。遺物の出土がなく時期は不明であるが、15、16世紀代に比定される可能性が高い。

⑭　中世竪穴２は長辺3.2～3.6m、短辺2.2～2.7mの長方形を呈し、深さ0.9mを測る。東側短辺にわずかな段がみられるが、出入り口の施設等に伴うものか不明である。床面は平坦で、柱穴はみられない。遺構内からの出土遺物は皆無であるが、中世遺構１と同様な時期であろう。

8　上屋敷遺跡（第297図）

上屋敷遺跡（註９）は竹田市久住町に所在する。掘立柱建物跡、溝などとともに竪穴建物が確認された。竪穴建物は、掘立柱建物に隣接し方位を同じくして構築されている。遺跡全体として出土遺物は少ないが、16世紀前後が中心となるようである。

⑮　７号竪穴は長方形プランを呈し、長辺3.5m、短辺2.6mを測る。深さは0.4mを測り、床面は平坦である。床面には柱穴が16本みられ、壁から0.3～0.4m入った位置で、壁に沿うように長方形に配される。柱穴は垂直に掘り込まれている。時期を決定できる出土遺物はないが、16世紀前後

に比定されよう。

9　野村台遺跡（第297図）

野村台遺跡（註10）は臼杵市に所在する。飛車丸地区Ⅱ区から、土坑などとともに竪穴建物が確認されている。

⑯　4号土坑は、長辺2.4m、短辺2.0mの長方形を呈するもので、深さ1.4mを測る。床面は平坦で、壁に沿い幅0.1mの溝が巡る。柱穴は認められない。15、16世紀代のものか。

10　清太郎遺跡（第297図）

清太郎遺跡（註11）は臼杵市に所在する。遺跡からは柱穴、土坑などとともに、竪穴建物が確認されている。遺跡は12、13世紀が主体で、16世紀代の遺物も出土している。

⑰　1号竪穴は長方形を呈し、長辺1.95m、短辺1.4mを測る。深さは0.4mで、床面は平坦である。四隅に柱穴が配されており、柱穴は垂直に掘られている。出土遺物が皆無なため、時期は不明であるが、16世紀代位置づけられる可能性が考えられる。

11　中世大友府内町跡９次（第298図）

中世大友府内町跡は大分市の大分川下流左岸に位置する。大友府内町は大友館、万寿寺、御蔵場等を中心に、南北方向の４本の街路、東西方向の小路により整然と区画されている。調査により、14～16世紀にかけての遺構・遺物が確認されている。

中世大友府内町跡９次調査区（註12）は、第２南北街路を挟んで大友館の東側にあたる。街路に面し町屋がみられるが、竪穴建物は町屋を構成する柱穴群に隣接するように確認された。

⑱　SK021は長方形を呈し、長辺2.8m、短辺2.3mを測る。深さは0.25mで、床面は緩やかな起伏がみられる。西側長辺の壁は段がみられ、壁際には壁に沿うように浅い溝が掘られる。柱穴は全く確認されていない。町屋を構成する柱穴列と方位をほぼ同じくすることから、町屋との強い関連がうかがえる。時期は16世紀後葉である。

12　中世大友府内町跡13次（第298図）

中世大友府内町跡13次調査区（註13）は、第２南北街路を挟さみ、大友館の東南側に位置する。南側には万寿寺の寺域が広がる。９次調査区同様、街路に面し町屋がみられる。

⑲　SB388は長方形を呈し、長辺3.8m、短辺2.5mを測る。深さは0.4mで、床面は平坦である。床面からは浅い柱穴と凝灰岩製の板石が検出されている。中央部が他遺構により破壊されているが、残存する部分において、柱穴配置に規格性はみられない。町屋の柱穴列と方位を同じくしていることから、16世紀代に比定されよう。

⑳　SB389は長方形プランを呈するもので、長辺3.8m、短辺2.5mを測る。深さは0.2mで、床面は平坦である。一部が他遺構により破壊されているが、長辺の壁に沿い３本、短辺の一方の中央に１本各々柱穴を配する形態であったことがうかがえる。柱穴は垂直に掘りこまれる。遺物が乏しく時期の決め手に欠くが、16世紀代のものであろう。

13　中世大友府内町跡18次西（第298図）

中世大友府内町跡18次調査区西（註14）は大友館東北部の東側に位置し、大友館に直接隣接している。

㉑　SB017は一部が調査区外に及ぶため全形が不明だが、隅丸基調の長方形を呈する。長辺4.6m以上、短辺3.2m、深さ0.45mを測る。床面には、やや傾斜がみられる。長辺、短辺の壁に沿い柱穴が配されており、長辺部分は現状で５本が確認されている。柱穴はいずれも垂直に掘りこまれる。時期は16世紀後葉～末に比定される。

14　中世大友府内町跡55次（第298図）

中世大友府内町跡55次調査区（註15）は御蔵場の南側に位置する。

㉒　SK80は長方形を呈する。長辺3.8m、短辺2.25～2.9m、深さ0.3mを測る。床面は平坦である。各辺の壁に沿うように柱穴が配されているが、南側長辺については、柱穴配置が直線ではなく折れ曲がる。柱穴は垂直に掘りこまれる。時期は16世紀中～後葉に比定される。

15　中世大友府内町跡75次（第298図）

中世大友府内町跡75次調査区（註16）は55次調査区の南側に位置する。

㉓　SB628は隅丸長方形ないしは小判形を呈する。長辺3.4～3.9m、短辺2.8～3.0m、深さ0.1mを測る。両長辺に沿い柱穴が６本づつ配され、いずれも外方向に向け斜めに掘りこまれている。16世紀前葉に比定される。

㉔　SB825は竪穴が削平されているが、柱穴配置から長方形プランを呈していたものと思われる。柱穴は両長辺に沿いみられ、いずれも外方向に向け斜めに掘りこまれている。出土遺物がなく時期は不明であるが、16世紀代に比定される可能性が高い。

16　中世大友府内町跡41次（第299図）

中世大友府内町跡41次調査区（註17）は75次調査区の西側に位置する。

㉕　SK242は長方形を呈するもので、長辺2.9m、短辺2.3m、深さ0.5～0.6mを測る。竪穴の壁に沿い石積みがなされており、両長辺の基底部には30～40×45～80cmの大型の石材を据えている。その上部及び両短辺は10～20cmの石材が積まれている。石積み内側の規模は、長辺2.2m、短辺1.6mである。床面は平坦で、南側長辺の南西隅近くの基底部石材横に柱穴が１本みられる。このほか、南側長辺東端の基底部石材は中央部が上面から20cmほど抉られており、柱を据えた可能性が考えられる。16世紀代のものである。

17　その他の遺構について（第299図）

以下に紹介するイ～ハは、竪穴という地下構造を利用した施設という点で、先に紹介した竪穴建物と共通する。しかし、竪穴建物と比べると規模がかなり小さい。また、イ～ハにみられる石積みや石敷きについても、竪穴建物では一部（中世大友府内町跡41次㉖）において石積みがみられるのみで、石敷きについては認められない。これらの遺構が竪穴建物として考えられるかは、後段で改めて検討する。

イ　利光遺跡久保地区土坑１

竪穴は長辺2.26m、短辺1.7m、深さ0.4mの長方形を呈し、竪穴内の四周は河原石による石積みがなされている。また、床面には扁平な河原石が敷き詰められている。壁面、床面ともに石の間には粘土による目張りが行なわれている。石積みの内法で、長辺1.9m、短辺1.25m、面積2.4㎡である。14世紀中葉のものである（註18）。

ロ　八坂中遺跡土坑195

竪穴の全容は不明だが、楕円形気味の長方形を呈するものと思われる。竪穴は長さ2.3m、幅1.8m、深さ0.75～0.8mの規模を有する。内部の四周には石積みがみられ、床面には扁平な石による石敷きがなされる。石の間には粘土による目張りは認められない。石積みの内法は長方形を呈し、長さ1.45m、幅0.8m、面積1.2㎡である。壁面及び床面の石は火を受けた痕跡が顕著に残る。14世紀代のものである（註19）。

ハ　八坂中遺跡土坑196

竪穴は長方形基調をなし、長さ2.2m、幅1.55m、深さ0.4mを測る。内部は四周に石積みと床面に石敷きがなされていたようであるが、残存状態がよくない。石積みの内法は長さ1.6m、幅１m、面積1.6㎡である。石積みと石敷きには火を受けた痕跡が顕著にみられる。14世紀前半のものである（註19）。

3

前段で紹介した竪穴建物は、柱穴の配置などから以下のように分類される。

Ⅰ類

方形や長方形など定形化した平面形を呈する竪穴で、竪穴床面に規格性をもつ柱穴配置がみられないものである。

古庄屋遺跡①～④、八坂中遺跡⑤、八坂本庄遺跡⑦、都野原田遺跡⑭、野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡９次⑱、中世大友府内町跡13次⑲、中世大友府内町跡41次㉕がⅠ類に相当する。これらの中には、遺構に直接伴わない可能性をもつ柱穴などがみられるものがある。仮に一部が遺構に伴うものであっても、Ⅱ類にみられるような規格性をもった配置は復元できない。よって、竪穴内には建物構造に直接係わる柱穴はないものと考えられる。ただし、補助的あるいは内部の間仕切り等に係わる柱穴については存在した可能性はある。

また、古庄屋遺跡③、野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡９次⑱には、壁に沿い全周または一部に浅い溝がみられる。これらが建物構造に主体的に係わるものか、壁面の保護等に係わるものかは定かではない。中世大友府内町跡41次？は竪穴四周の壁に石積みがなされており、明らかに壁面の保護を目的としたものであると思われる。

面積をみてみると、30㎡以上の大型のもの（古庄屋遺跡①、③）、10㎡前後のもの（八坂中遺跡⑤、八坂本庄遺跡⑦、都野原田遺跡⑭、中世大友府内町跡13次⑲）、５㎡前後のもの（野村台遺跡⑯、中世大友府内町跡９次⑱、中世大友府内町跡41次㉕）がある。傾向として、13世紀代などのものが規模が大きいことが分かる。

時代的には、出土遺物から13世紀後半～16世紀までのものが確認されている。このほか、出土遺物がなく時期の決め手に欠くが、遺跡内の状況からさらに遡る可能性を有するもの（八坂本庄⑦）もある。

Ⅱ類

建物の上屋構造を支えると想定される柱穴が床面にみられるものである。これらは、柱穴配置により１～３に分けられる。また、柱穴の掘り方ついては、A垂直に掘られるものとB斜めに掘られるものがみられる。

Ⅱ１A類

竪穴の中央に柱穴をもつものである。八坂中遺跡⑥がこれに相当する。八坂中遺跡⑥については、竪穴の掘り込み部周にも柱穴が確認されており、竪穴内の１本と併せて上屋構造を支えたものと考えられる。今回集成した25例の中で、竪穴外に上屋構造を支える柱穴が確認されたのはこの１例のみである。竪穴内に柱穴が確認されなかったⅠ類のなかに、削平により残存していないが、このような例があった可能性も考えられる。

竪穴面積は約５㎡と小規模である。

Ⅱ２A類

竪穴の四隅に柱穴を配するもので、柱穴は垂直に掘りこまれる。都野原田遺跡⑬、清太郎遺跡⑰がこれに相当する。

面積的には小規模で、両者とも５㎡前後以下である。

Ⅱ２B類

竪穴の四隅に柱穴を配するもので、柱穴が外向きに斜めに掘られる。上城遺跡⑧がこれにあたる。

規模的には、面積が10㎡前後である。

Ⅱ３A類

両長辺に沿い３本以上の柱穴を配するもので、柱穴は垂直に掘りこまれる。中原遺跡⑫、上屋敷

遺跡⑮、中世大友府内町跡13次㉙、中世大友府内町跡18次西㉑、中世大友府内町跡55次㉒がこれに相当する。

規模的には面積が10～15㎡で、Ⅱ２類に比べるとやや規模大きいことが分かる。

時代的には、16世紀代に位置づけられる。

Ⅱ３B類

両長辺に沿い３本以上の端穴を配するもので、柱穴は外向きに斜めに掘りこまれる。小城原遺跡⑨、中原遺跡⑩、⑪、中世大友府内町跡75次㉓、㉔がこれに相当する。

規模的には10㎡前後である。

時代的には、15、16世紀に位置づけられる。

4

大分県下で確認されている竪穴建物の紹介と分類に基づき、いくつかの問題について検討を行なう。

・大分県下の竪穴建物出現時期について

県下の竪穴建物のうち時期的に古いものは、13世紀後半の古庄屋遺跡①～④、13世紀後半～14世紀初の八坂中遺跡⑤、13～14世紀の上城遺跡⑧である。このほか、八坂本庄遺跡⑦は出土遺物がなく時期が不明であるが、遺跡では12世紀と14世紀の遺構・遺物が確認されており、主体となる12世紀に位置づけられる可能性をもつ。九州内の例として、福岡県の博多遺跡群では11世紀後半からの出現が確認されている（註20）。

初期の竪穴建物が検出された遺跡のうち、古庄屋遺跡は、古代以来の既存の在地勢力とは異なる勢力が係わる居館である可能性をもつ。具体的には、鎌倉幕府の成立に伴ない下向し、豊前国の支配を行った東国御家人に深く係わる勢力であることが想定される。八坂中遺跡、八坂本庄遺跡は、八坂川の下流において川に面するように立地する遺跡である。水上交通と深く係わる八坂荘の表玄関的遺跡で、物資の集積ステーション的役割を担っていたものと考えられる。出土遺物をみても、楠葉型瓦器椀、和泉型瓦器椀、吉備系土師器、京都系土師器など遠隔地より持ち込まれたものが確認されている。上城遺跡は、当地を支配した朽網氏に係わる居館と推定される。朽網氏の出自については、史料的に必ずしも明ではないが、『久住町誌』（註21）によれば、12世紀後半に大神氏系の大野氏が朽網氏を名乗ったのが起こりとされている。しかし、建久７年（1193）に反乱を起こし大友能直・古荘重吉に敗れると、領地は古荘重吉に与えられたという。朽網氏も古荘重吉の子孫が継承したと推測されている。これらのことが事実であれば、上城遺跡の居館は東国御家人と少なからず係わるものであったことが分かる。

以上のように、大分県下における竪穴建物出現期の遺跡は、畿内や東国との係わりを強くもつ遺跡であることが分かる。資料数が少ない段階ではあるが、竪穴建物出現に畿内や東国からの影響が大きかったものと推測される。南九州の竪穴建物を検討した堂込秀人も、東国からの移入を指摘している（註22）。

・大分県における竪穴建物の変遷について

前段で述べた県下における出現期の例のうち、上城遺跡⑧のみがⅡ２B類で、他はⅠ類である。よって、出現期の13、14世紀代までは、Ⅰ類が優勢であったと言える。この段階の特徴として、竪穴面積の大きなものが目立つ点である。なかでも古庄屋遺跡①、③のように30～50㎡に及ぶものもあり、15、16世紀段階とは大きく異なる。神奈川県の鎌倉遺跡群では、竪穴内に柱穴がみられないものが主体を占めるようである。これらは、床面に据えられた土台角材から柱を組み上げる構造である（註23）。Ⅰ類については、竪穴外に柱穴を配置し、これを利用し上屋構造を組み上げた可能

性もあるが、鎌倉遺跡群の例は上屋構造を考えるのに参考となるものである。一方で、大庭康時は、床面に柱穴などをもたないものについては、屋内に設けられた地下貯蔵庫の可能性を指摘している（註24）。しかし、30～50㎡に及ぶ大規模なものにあっては、単独の構造物と考えた方が良さそうである。

また、竪穴建物のみられる遺跡は、前述したように、鎌倉時代になり東国から下向した支配層に強く係わる遺跡や水上交通の拠点として畿内などと強いつながりをもつ遺跡などである。導入段階においては、限定された遺跡でみられる傾向にあるようである。

15、16世紀代になるとⅡ類が圧倒的に優勢となる。この段階では、Ⅰ類→Ⅱ１類→Ⅱ２類→Ⅱ３類と相対的に竪穴面積が増加する傾向がうかがえ、規模に応じた構造を採用していたことが推測される。この段階にいたり、導入期段階で主体を占めた土台角材から組み上げる構造から、いわゆる柱穴建ちの建物構造に主体が変化した可能性も考えられる。

この段階になると、支配階層に加え一般的な集落でもみられるようになるが、広く一般的にみられるという状況ではなく、その数は少ない。

・竪穴建物の機能について

現在、竪穴建物の機能については、半地下式の収納施設として理解される場合が多いが、皮革製品加工等の工房跡を想定する考えもある（註25）。果下の例をみると、13、14世紀の導入期では限られた遺跡でのみみられたが、15、16世紀になり一般的な集落でも散見されるようになる。しかし、その数はまだ少なく屋敷を構成する一般的建物とは言えない状況である。竪穴建物が一般的な収納施設であれば、確認される遺跡数や遺跡内での数がもっと多くなりそうである。15、16世紀においてもある程度限定された状態で構築されているとすれば、その理由として以下のような可能性が考えられる。（１）いくつかあった通常の収納施設の一形態で地域や遺跡の事情により竪穴建物採用に差が生じた、（２）単なる収納施設ではなく特定の機能に関連する施設あるいはそれに伴う収納施設、などである。（１）の場合は、竪穴建物は特定の限られた機能・性格をもたない通常収納施設のバリエーションのひとつであることから、これらを採用した遺跡と採用しない遺跡の間には性格的な差は基本的にないと考えられる。ただし、導入期においては、竪穴建物そのものが東国や畿内方面との関連から導入されたと考えられることから、それらに関係する特定の遺跡においてみられたものであろう。（２）の場合、竪穴建物は特定の機能に特化した施設であることから、竪穴建物を有する遺跡とそうでない遺跡には、遺跡の性格自体に大きな差があると考えざるをえない。竪穴構造を伴う建物を必要とする特定の機能が何であったのか、これまでの調査における遺構・遺物からは確たる根拠を見出しえない。（１）、（２）に係わる問題については、今後の資料増を待ち考えていきたい。

最後に、類似の遺構として紹介したイ～ハについて検討する。これらは、地下空間を利用した施設であるという点で竪穴建物と構造的に類似するもので、先に示した竪穴建物の分類に従えばⅠ類に相当する。しかし、竪穴建物に比べると小規模である点や、石積みや石敷きが顕著に火を受けていたり（ロ、ハ）、石の間に粘土で目張りする（イ）などの状況を考慮すると、竪穴建物と異なる機能をもつ施設であると考えることも可能であり、現時点でその判断は難しい。仮に、イ～ハが竪穴建物と同様な機能を有する施設であった場合でも、竪穴建物が柱穴配置などからしっかりとした上屋構造をもつものであるのに対し、イ～ハについては個別に上屋構造をもつものであったかは疑問である。竪穴建物はそれ自体独立した建物として認定できるもので、その機能が収納であれば収納庫あるいは収納棟と呼べるものであろう。一方、イ～ハはその規模から独立した建物であったとは考え難く、収納の機能を有するものであれば、建物というよりも貯蔵穴あるいは穴蔵と称すべきものであろう。イ～ハの位置づけについても、今後の検討課題としたい。

註

（1）多くの先行研究があるが、個別の紹介は割愛する。ここでは全国的な視野に立ち、その動向をまとめた近年の研究を紹介する。

堂込秀人「竪穴建物」『季刊考古学』第85号　2003年

鈴木弘太「中世「竪穴建物」の検討」『日本考古学』第21号　2006年

（2）大分県教育委員会『古庄屋遺跡』大分県文化財調査報告書第141輯　2002年

（3）大分県教育委員会「八坂中遺跡」『八坂の遺跡』大分県文化財調査報告書第150輯　2003年

（4）大分県教育委員会「八坂本庄遺跡」『八坂の遺跡』大分県文化財調査報告書第150輯　2003年

（5）久住町教育委員会『上城遺跡』2002年

（6）久住町教育委員会・大分県教育委員会「小城原遺跡」『小城原遺跡・中原遺跡』2002年

（7）久住町教育委員会・大分県教育委員会「中原遺跡」『小城原遺跡・中原遺跡』2002年

（8）久住町教育委員会・大分県教育委員会『都野原田遺跡』2001年

（9）久住町教育委員会「上屋敷遺跡」『小路遺跡・上屋敷遺跡』2000年

（10）大分県教育委員会『野村台遺跡』大分県文化財調査報告書第156輯　2003年

（11）大分県教育委員会『清太郎遺跡』大分県文化財調査報告書第115輯　2001年

（12）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第９次」『豊後府内』4
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第９集　2006年

（13）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第13次」『豊後府内』2
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第２集　2005年

（14）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第18次」『豊後府内』4
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第９集　2006年

（15）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第55次」『豊後府内』9
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第24集　2008年

（16）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第75次」『豊後府内』16（第３分冊）
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第48集　2010年

（17）大分県教育庁埋蔵文化財センター「中世大友府内町跡第41次」『豊後府内』16（第１分冊）
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第48集　2010年

（18）大分県教育委員会『利光遺跡』大分県文化財調査報告書第132輯　2002年

（19）註（３）に同じ

（20）大庭康時「博多遺跡群における考古資料の分布論的検討メモ－将来の「場」の研究に向けて－」
『博多研究会誌』第５号　1997

（21）久住町『久住町誌』　1984

（22）堂込秀人「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号　1999年

（23）鈴木弘太「中世「竪穴建物」の検討」『日本考古学』第21号　2006年

（24）註（20）に同じ

（25）註（22）に同じ